スピリッツ！！　～おちこぼれ勇者の大冒険～

ルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スピリッツ！！　～おちこぼれ勇者の大冒険～

【Ｎコード】
Ｎ９０５８Ｌ

【作者名】
ルナ

【あらすじ】
エレナとルークはおさななじみ。優秀な力をもつ彼女と、おちこぼれのルークは、とても仲が良かった。が、とある儀式の日、彼女が何者かにさらわれてしまった。それを助けられるのは、ルークだけ！？落ちこぼれ勇者が、おさななじみの少女を救うためにがんばる物語、今ここに誕生！！

プロローグ　～精霊祭～

村一番の稼ぎ頭、エレナ＝ルクウィッドと、
あまりに強すぎる力をセーブできなくて
落ちこぼれと言われる少年、ルーク＝
ウレイアが出会ったのは、聖クリシュア村の
精霊祭でのことだった。当時、二人は四歳だ。
　ルークは別の村から越してきたばかりで、不安
そうにしていて、村人の輪に入っていけなかった
ので、エレナが声をかけたのだった。
「ねえ、あなたなまえなんていうの？
　あたし、エレナ。いっしょにあそぼ」
「うん！！」
　そう言ってにっこりと笑った顔が魅力的だったのを、
エレナは十五になった後も覚えていた。
　それなのに。それなのに！！
　エレナは今、ひどく悩んでいたーー。

エレナは村に来る依頼を、魔法と剣術でもって
次々とこなしていて、村人の評価は高かった。
　弟のビショップも、薬学や医学に秀でていて、
姉どうよう人気は高い。がーー。
　ルークは違った。
　よそものというだけでも立場は悪いのに、剣術も魔法も
うまく使いこなせないのだ。
それに、両親も親代わりの祖父母もすでになく、後ろ盾もない。
　ルーク＝ウレイアは、村ではやっかいもの扱いされていた。
小さい子でもできる依頼さえも、こなすことができないからだ。
子供にも、すでに引退したおじいさん連中にも

馬鹿にされている様子を見ると、エレナはとても悲しくなる。
だって、エレナは彼を愛しているから。
十一年前、会った時から、ずっと。

エレナは今日の依頼、薬草探索を終わらせ、聖クリシュア村に戻ってきた。
彼女の祖父、エルクが声をかける。
「おかえり、エレナ。依頼がまた来ておるよ」
「ただいま、おじいちゃん。後で見に行くわ」
「ほんにお前は優秀じゃなあ、それにくらべて、ウレイアの小僧はいつまでたっても落ちこぼれじゃ」
「おじいちゃん！！」
キッとエレナは、エメラルドグリーンの大きな目で祖父を睨みつけた。美しい金髪が揺れる。
「ルークはおちこぼれなんかじゃないったら！！
力をうまく使えないだけだって言ってるでしょう！？」
「ちっともうまくならんのは、やる気がない証拠じゃ」
「違うわ！！　ルークはがんばってるもの！！
おじいちゃんに何がわかるのよ！！」
「どうしてあの小僧をかばうんじゃ！！」
「そ、それは～」
エレナの顔がみるみるうちに赤く染まった。ギョッとなり、祖父が別の理由で赤くなって怒鳴る。
「いかん！！　ウレイアの小僧だけはいかんぞ！！
絶対に認めん！！　駄目じゃ！！」
「もういいわ、おじいちゃんなんか知らない！！」
「あ、エレナ、話はまだ終わっておらんぞ！！」
エレナはその場から逃げだした。
エレナは一度家に戻り、若草色のかわいいドレスに着替え、髪を念入りにブラッシングし、百花白蓮（フルール・ブラン）

の髪飾りをつけ、鏡でチェックしてから家を出た。
それにかかった時間は、二時間である。
恋する乙女は、準備にも時間がかかるのだ。

エレナは焼いておいた、ルークの好物、チーズ入りのカップケーキの
入ったかごを持ち、ルーク＝ウレイアに会いに行った。
「たあああああっ！！」
ルークは戦っていた。無謀にも木の棒で。某ゲームに出てくる、
最初の武器よりももろくて弱い武器だった。
ルークが弾き飛ばされ、木の幹に頭を強打！！
彼が戦っている敵は、木の幹に縛り付けられた、太い木の丸太だ
った。
練習として使っているらしい。
「あああああああ……ぜんぜんだめだあ」
ルークは人懐こそうな顔をしかめ、呻いた。
頭から少し血が出ているが、気づいていないらしい。
「ルーク！！」
エレナが声をかけると、ルークはぱっと笑顔になった。
二人はとても仲がいいのだ。ルークは、エレナの想いを
まったく気づいていないが。
「エレナ！！」
「これ食べて。どうせ、何も食べてないんでしょ？」
「ありがとな、エレナ」
ルークはカップケーキを受け取ると、ものすごい勢いで
食べ始めた。お腹がへっていたらしい。
何かに熱中し始めると、他のことを忘れるのは、彼の悪い癖だっ
た。
エレナは自分のハンカチを取り出すと、ルークの頭に押しあてた。
照れ隠しのため、幾分乱暴にやったので、ルークが叫ぶ。

「い、いたたたた！！　エレナ、痛い！！」
「怪我をしたルークが悪い！！　おとなしくしてよ」
「ううううう。そうだけどさあ……」
　ルークは涙目になった。それでも、ごちそうさま、と手を合わせることは忘れない。
「ちょっとは上達、した？」
「したよ！！　ほんのちょっぴり、だけどな」
　ルークは木の枝を構えると、さっきの丸太に向かって一直線に振りぬいた。かなりちいさな光の玉が出現し、それにぶつかる。……何も変わらなかった。
　丸太は動きもせず、光はすぐに消えた。
　それでも、エレナは笑顔になった。
「やったじゃない、ルーク！！」
　そのかわいらしい笑顔に、ルークは思わず真っ赤になった。照れ隠しでエレナから目をそらす。
「は、早く帰れよ。おじいさんに怒られるぞ」
「何よ、その言い方！！　それに、おじいちゃんは関係ないじゃない！！」
「あるよ！！　俺に会っちゃダメっていわれてんだろ！
　俺はおちこぼれ、だからな」
　カッとなり、エレナはルークの頬を平手で叩いた。かなり力を込めたので、彼の頬には手形がはっきりとついている。
　いてえっ、とルークが叫んだ。
「ルークのバカッ！！　そうやって卑屈なことばっかり考えてるから、いつまで経っても力が使えないのよ！！」
「うるせえな！！　とっとと帰れっ！！」
　そう怒鳴ったルークは、エレナの目に涙がたまってるのを見て、焦ったような顔をした。
　誰でも女の涙には弱いものだが、あまり女性が得意でないルークには、かなりの弱点だった。

「な、泣くなよ、エレナ！！」
「迷惑？　私が来るの、迷惑なの？」
「ち、違うよ。だけど……」
「だけど、何！？」
「悪いな、と思って。お前、いつも忙しいのにさ。俺なんかのために……あ、ごめん、怒んなって！！
今のは言葉のあやだって！！」
「私が好きでやってるのからいいの！！」
　エレナは泣きやんだ。少しはにかんだように言葉を切り、そしてルークの顔を覗き込んで言った。
「ねえ、もうすぐ精霊祭よね？」
「そうだな」
「私、精霊の巫女をやるのよ。ビショップも選ばれたんだけど、女の子のカッコなんてヤダッ、て辞退しちゃったの」
「へえ、パートナーは誰を指名するんだ？」
　精霊祭とは、聖クリシュア村につたわる、伝説をもとにした祭りだった。
精霊の巫女は一度村人全員の前で、一人で踊った後、選んだパートナーとともにもう一度、踊るのだ。
「私は、ルークを指名したい、と思うの」
「俺！？　他にも男はいるじゃん。エレナなら、どいつだってよろこんでー」
「私はルークがいいの！！」
　エレナはルークの声をさえぎった。彼以外とは、誰とも踊りたくはない。彼だから、踊りたいのだ。
「なんで？」
「な、なんでって……」
　まさかこの場で、あなたが好きだから、とも言えない。赤くなったエレナはルークを怒鳴りつけた。
「ルークの鈍感！！　もう知らない！！」

「な、なんだよ〜！！」
ルークの不満そうな声を聞きながら、エレナは走り出した。
「ルーク、またお姉ちゃんを怒らせたの？」
「ビショップ！！　いつからいたんだ！！」
ルークはギョッとなって振りかえった。金髪の男の子が、こちらをじいっと見ていたのだ。
「ルークのバカ、あたりから」
「いたなら声かけろよ！！」
エレナの弟、ビショップ＝ルクウィッドは、くすくすと笑いだした。まだあまり男っぽくない、かわいい顔立ち。エレナより少し薄い緑の目に、淡い色の金髪の子だ。
「お姉ちゃんの言ってたこと、あってると思うよ。ルークが卑屈だからって言うの、さ」
「お前までそう言うのかよ！！　俺だってなあ、やればできるんだよ！！」
やけになったルークは、木の枝を構え、さっきと同じことをした。が、さっきとは違い、現れた光の玉は、かなり大きかった。丸太に直撃し、それをはじきとばし、バラバラにする。ビショップの目が大きく見開かれ、ルークは思わずへたり込んだ。
「で、できた……」

力が使えるようになったルークは、すぐにエレナに会いに行った。彼女に教えようと思ったのだ。
だが、エレナは精霊の巫女の、踊りの最終確認をしていた。すでに衣装に着替えていて、ふわふわとした白い衣装が、とてもよく似合っていた。
髪にはさっきの、百花白蓮（フルール・ブラン）の髪飾りがまだあった。
「何、ルーク？　どうしたの？」
エレナは何か期待したような目で言った。似合うよ、

とほめてくれることを望んだのだ。
　ルークはそれには気づかず、エレナの髪飾りにのみ目がいっていた。
「なんでもないよ。それよりさ、その髪飾り、もっと綺麗なの持ってるんじゃないの？　替えたら？」
「え」
　エレナが固まった。その目が、しだいに怒りに染まっていく。ルークは驚いて後退した。
「ルーク！？　これのこと、忘れたの！？」
「なんのことだよ？」
「バカッ！！」
　返事は怒鳴り声とパンチだった。ルークは天幕から追い出された。
　ついてきてはいたけれど、中には入らなかったビショップは、目を丸くして聞いた。
「またお姉ちゃんを怒らせたの？」
　腹が立っていたルークは、ボカリと彼の頭を殴りつけて泣かせ、見学
に来ていた祖父に怒鳴りつけられた。

「ルークのバカ」
　エレナは髪飾りに触れ、うつむいた。彼女のこの百花白蓮（フルール・ブラン）の髪飾りは、ルークが幼いころ、くれたものだったのだ。
　四歳のころの精霊祭の時、ルークが屋台で買ったものなので、安物だが、エレナはとても気に入っていた。
「ルークのバカ」
　もう一度言い、エレナは踊りの確認を再開した。

　そして夜になり、精霊祭が開始された。
　光輝く祭壇にエレナが立ち、くるくると螺旋（らせん）を描くように踊りだした。衣装が金色にきらめき、光が、彼女が舞うたびに飛ん

だ。
　その幻想的なダンスに、全員が目を奪われた。
弟と、その祖父さえも。それほどに彼女の舞は美しかった。
　ぼうっと見とれていたルークは、彼女の声で我に返った。
「精霊の巫女は、ルーク＝ウレイアをパートナーにえらびます！！」
「ルーク、祭壇に上がって」
　ビショップが声をかける。ルークは慌てて祭壇に上がり、顔を赤らめた。
おずおずと手を差し出し、エレナがその手を取ろうとする。
　二人の手が触れあった、その時だった。
　突風が二人の間にのみ吹き荒れ、ルークの手が離れた。
「ルーク！」
「エレナ！！」
　空中に上がった彼女を受け止めたのは、黒衣を着た怪しげな男だった。
　にやり、と血のように赤い唇が笑みを浮かべる。
「精霊の巫女はいただいていく！！」
「エレナを返せ！！　このやろう！！」
　ルークの放った光の玉は、しかし、男に当たることはなかった。
　結界のようなものにはじかれてはねかえり、
ルークを祭壇から叩き落とした。
「エレナ！！　エレナー！！」
「ルーク！！」
　エレナは男とともに消えてしまい、あとには白い髪飾り
だけが残された。

プロローグ　～精霊祭～（後書き）

初めての冒険ものです。主人公がへたれですが、
がんばる予定なので
どうかかわいがってやってください。

おちこぼれ勇者、誕生！？

ルーク＝ウレイアは、さっきまで、おさななじみのエレナ＝ルクウイッドがいた祭壇を、茫然としながら見つめていた。

「エレナ……」

エレナは精霊祭の最中に、いきなりさらわれたのだ。

ルークの目の前で。

「ルーク！！　お姉ちゃんが！！　お姉ちゃんが！！」

彼女の弟、ビショップが泣きながら抱きついてきた。

優しく抱きよせ、ルークはその背を軽く叩いてやる。

「落ちつけよ、大丈夫だって」

「なんなの、あの人！　お姉ちゃんはどこにつれてかれたの！？」

「俺が知るわけないだろ！！」

怒鳴ったルークは、祭壇の真ん中になにかが刺さっているのに気付いた。それは剣だ。銀色に輝く剣がそこにはあった。

？その剣を取りなさい？

きん、とルークの頭に痛みが走った。

きれいな女性の声が、いきなり頭の中でしたのだ。

？ルーク、その剣を取るのです。精霊の巫女のために？

「だ、誰だよ、あんた！！　なんで俺の名前を知ってるんだよ！！精霊の巫女ってなんだよ！！」

ルークは痛みに耐えかねて叫んだ。村人が、奇妙なものでも見るような目で、ルークを見ていた。

それが聞こえるのは、ルークだけらしかった。

ビショップさえも、怪訝な様子を隠そうともしない。

ルークは仕方なく、剣に手を添え、引き抜こうとした。
パチパチと火花が飛び散る。手がひどく痛んだ。だが、エレナのためならばと必死で耐える。
十分くらいそうしていただろうか。
ようやく剣が抜け、ルークはひっくり返って祭壇から落ち、背中を強く打った。再び声が聞こえた。
?よくがんばりましたね、ルーク。ありがとう……?
ピシッと祭壇にヒビが入った。そのままヒビは広がっていき、さらに半分に割れる。その中から、光り輝く十三体の球体と、神々しい光を放つ、美しい少女が現れた。

「よくぞ、封印を解いてくださいました、ルーク。私は精霊の姫、アンジェ。この祭壇に、長気にわたって封じられていたのです」
「精霊って、おとぎばなしじゃないのか?」
「いいえ、違います。精霊は本当にいます。ここに……」
十三体の球体がさらに光を放ち、それぞれ姿をかたどった。
一斉に、睨むようにルークを見る。
いきなり睨まれ、ルークはたじろいだ。
「勇者・ルークよ、精霊の巫女・エレナを助けるためには、ここにいる十二精霊に力を示さなければなりません」
「勇者!? 俺が!?」
『おちこぼれのルークが!?』
ビショップ以外の子供たちが、ギョッとしたように言った。
大人たちは何も言わないが、一様に驚いたような顔をしている。
「駄目じゃ!! ウレイアの小僧なんぞに、エレナを救えるわけはない!! 選ぶなら他のものにしてくれ!!」
エレナの祖父ががなりたてた。ルークは悲しそうな顔になり、ビショップはキッと祖父を睨む。
「駄目です。エレナを助けるのは、ルークです。ルーク以外に

はなしえません。これは決められたことなのです」
が、アンジェはそれをすっぱり切り捨てた。
「こんな落ちこぼれになにができる！！」
「ルークは落ちこぼれではありません。さっき、あなたも見たでしょう？　当たらなかったものの、さっきの男にルークが攻撃したのを」
ぐっと祖父が押し黙った。

「ルーク、こちらに・・・・・・」
アンジェに言われ、ルークは慌てて近づいた。十二精霊たちがぞろぞろと集まる。
「炎の精霊・スコルピオン」
「はいはーい、あたしがスコルピオンちゃんでーす！！」
赤い球体に入ったかわいい少女が明るく言った。
「水の精霊・ヴェルソー」
「ヴェルソーと申しますわ」
すました様子で、青い球体のきれいな女の子が頭を下げる。
「大地の精霊・カプリコルヌ」
「おいらがカプリコルヌだぜ～」
呑気な様子で茶色の球体の少年があいさつした。
精霊にも、いろいろな奴がいるらしい。
だが、すべてに共通しているのは、ほとんどが、ルークを歓迎していないらしい、ということだった。
楽しそうな様子なのは、単に自己主張が強いだけのようだ。
「風の精霊・双子のジェモー」
「ジェモー（姉）です。よろしく」
「ジェモー（妹）だ。文句ある奴はかかってこい！！」
黄色の球体の、おとなしそうな少女と、男勝りな少女がそれぞれ名乗る。姉だけは、ルークに笑いかけてくれた。

「根源の精霊・バランス」
「バランスじゃ。まだまだ若い者には負けんぞ」
おじいさん精霊がかっかっか、と笑った。彼は白い球体だ。
「月の精霊・ヴィエルジュ」
「ヴィエルジュよ。あんたなんかに、覚えてもらわなくていいからね」
じとり、と冷たい目で銀色の球体の少女が毒づく。
はあ、とアンジェがため息をついた。
「太陽の精霊・サジテール」
「サジテールだよ！！」
目をきらきらさせて金色の球体の少女が叫ぶ。
にこにことルークの方を見ていた。
中には、ルークのことを気に入ったものもいるらしい。
「大樹の精霊・ベリエ」
「・・・・・・ベリエ。よろしく・・・・・・」
緑色の球体の少年がぺこりと頭を下げる。
ルークが気に入らないというよりは、どことなくおびえているように思えた。
「闇の精霊・リオン」
「けけけっ！！　リオンだぜ」
黒い球体の少年が気味悪く笑った。
「海の精霊・ポワソン」
「よろしく～。私～ポワソン～」
のんびりとした口調で水色の球体の少女が言う。
が、目だけは鋭くルークを睨みつけていた。
「星の精霊・カンセール」
「カンセールだ」
無愛想な感じで緋色の球体の少女が呟いた。
「守護の精霊・トロー」
「トローだよ。あんたが勇者なんて

認めないからね」
「トロー！　口を慎みなさい！！」
透明な球体の少年は、べえっと舌を出しながらわめきたて、アンジェにぴしゃりと叱られた。

「これで全部ですわ、ルーク」
「わかったよ、俺、旅に出る！！　エレナを絶対に助け出す！！　精霊にだって認めさせてやるさ！！」
その言葉に、大半が怒りを示し、ジェモー（姉）、サジテール、ベリエがぱちぱちと拍手した。
「そのいきですわ、ルーク！！　私も協力します、絶対にエレナを取り戻しましょうね」
ガッツポーズをするアンジェ。ルークは笑顔で頷いた。が、祖父がまた口を出して来て、その顔が落ち込んだ。
「ルークだけじゃ心配じゃ。誰か、他の者もいかせてくれんか」
ルークと同じ年の少年たちが、そうだそうだ、と騒ぎ出した。キッとアンジェが睨みつけて言う。
「駄目です。同行人は認めません。・・・・・・ですが、精霊の巫女の血縁者ならば認めましょう」
ぱあっとビショップの目が輝いた。
「じゃあ、僕もルークの助けになるよ！！　僕、剣術は自信ないけど、魔法と回復術なら得意だよ」
「よろしくな、ビショップ！！」
手を取り合う二人。と、ビショップが祭壇のそばに落ちていた髪飾りに気付いた。
「あっ！！　これ、百花白蓮（フルール・ブラン）の髪飾りだ！！
お姉ちゃんの宝物！！」

「なんでこれがエレナの宝物なんだよ？」
ルークがきょとん、としたように聞く。ビショップの目が大きく見開かれた。
「ルーク、覚えてないの！？　これ、四歳くらいの時に、ルークがくれたものだって、お姉ちゃん、言ってたよ」
ルークは髪飾りを拾い上げた。エレナの怒った顔を思い出す。
『ルーク、これのこと忘れたの！？』
その顔は、失望と怒りがあふれていた。
「でも、なんでエレナが俺のあげた奴を大事に持ってるんだろ。こんなの安物だぜ。まあ、きれいではあるけど」
「ルークってバカだね」
ビショップがあきれたように言った。
「ば、バカってなんだよ！！」
「ん～。じゃあ訂正する。かなり鈍いね」
「・・・・・・そんなに殴られたいかよ、ビショップ」
ルークの声がやや低くなった。ギクッとなった彼は、素早く逃げだした。待て、とルークが追いかける。
二人はこうして旅立った。精霊の姫だという少女と、十三名の精霊たちとともに。

その頃、さらわれた、エレナはー。
どこだかわからない城に幽閉されていた。
縛られてはいないが、ドアには鍵がかかっていて開かない。
窓から出ようにも、かなり高いところにある部屋らしく、それは無理だと思えた。無理に出ようとすれば、大けがか死は免れないだろう。
エレナは舌打ちした。
「なんなのよ、この部屋は！！　ここ、どこなのよ！！」
エレナは髪飾りがあった位置に手を滑らせ、気を落ち着かせようと

した。が、そこには何もなかった。
ただ、やわらかい金髪があるのみだ。
「髪飾りがない！！　おとしたんだわ、あの時・・・・・・」
エレナのエメラルドグリーンの目が潤んだ。彼女はそのまま膝を抱えると、小さな声ですすり泣いた。
「たすけて、ルーク、ルーク・・・・・・」

おちこぼれ勇者、誕生！？（後書き）

やっと次話投稿です。ルークたちの冒険はまだ始まったばかりです。

精霊の巫女の秘密

エレナ＝ルクウィッドは、何者かにさらわれ、謎の城の一室に幽閉されていた。窓の外はかなり高く、落ちれば死か大けがが待っている。

それでもエレナは考えた。

高価そうなカーテンや、白い丸テーブルにかけられたシルクの布をひっぺがし、それでも足りないので、クローゼットに入っていたドレスを勝手に拝借し、ようやく綱上につないだものができあがった。

窓を開け、慎重に綱をおろそうとした、まさにその時だった。

「なにをやっているの、あなた！！」

いきなり鍵のかかっていたハズの扉が開き、きれいな銀髪の娘が入ってきたのだ。

彼女は慌てて食事の乗った銀盆を置き、エレナを後ろからはがいじめにした。

「はなして！！　はなしてよ！！」

エレナはじたばたと暴れた。が、娘の力は緩まない。かなりの力がこもっていた。

「ここからは出れないわ！！　死んでしまうのよ！！」

娘は一旦片手を離し、部屋に置いてあった置物のひとつを掴むと、窓の外に放り投げた。

とー

バチッと電撃が走り、それは焼き焦がされた。
少しの塵も残らない。エレナは青ざめた。
体から力が抜け、へたり込む。
「な、なにこれ・・・・・・」
「結界が張ってあるの。前に同じことを
しようとした人がいたから、あの方が
張ったのよ」
「あの方？」
彼女の藍色の目が曇った。まるで曇天（どんてん）の空の
ような印象を受け、エレナは目をそらす。
引き込まれそうなほど、きれいな目だった。
「私は、あの方の名前を教えていただいて
ないの。ごめんなさいね」
「いえ、わ、私こそ、ごめんなさい」
ようやく彼女の手は離された。窓を閉め、置いてあった
銀盆をエレナに差し出す。
「これ、食事よ。食べてね。・・・・・・・あ、それと、
ここにあるものは自由に使っていいからね。」
「あ、あの・・・・・・ここからは、出れないの？」
「まだ駄目だと思うわ。？適合？するまでは、私たちも
あなたを自由することができないの」
頭を下げ、娘は出て行こうとした。
エレナが呼びとめる。
「あ、あの！！　あなた、名前は？」
娘は驚いたように藍色の目を見張った。
「ステラよ。ステラ＝ワイズ。あなたは？」
「エレナ＝ルクウィッドです」
「エレナちゃんね。よろしく」
笑顔になり、娘ーステラは、部屋を出て行った。
かちゃり、と鍵のかかる音が響く。

逃がしてくれる気はないらしい。
そんなに甘くはないか、とエレナは舌打ちした。
でも、悲観していてもはじまらない。
「ルークが迎えにきてくれるまで、がんばるわ」
ぐっとこぶしを握り、エレナは着替えるために
クローゼットを探り始めた。

その頃、ルーク＝ウレイアは。
エレナの弟、ビショップとともに、精霊の姫・アンジェ
の説明を受けていた。
「いいですか、ルーク。その剣は、精霊の剣。精霊たちの
力がなくては、意味がありません。まずは、つかの部分を
みてみてくれますか？」
ルークは銀色の剣のつかに注目した。十二個の小さなくぼみ
のようなものがある。そのうち、二つだけに、小さなキラキラ
した宝石がはめてあった。金色と緑色のやつだ。
「これは精霊に認められた証です。この場合は、サジテールと
ベリエですね。全員を認めさせないと、あの男は倒せません」
「アンジェ、ジェモーの場合はどうするんだ？　あいつら
双子だろう？」
「良い質問ですね。ジェモーは両方に認められないと、
この宝石ー？プリュネル？は、つきません」
「わかった」
それから、アンジェはちいさな弓を出し、ビショップに渡した。
「あなたにはこれを渡しておきますよ。精霊の弓です。
剣よりは威力は弱いですが、ルークの補助くらいはできますよ」
「わあ、ありがとうございます！！」
澄み切った緑色の瞳が輝いた。銀色の弓を手に取った彼は、
はしゃいでひっくり返したり、構えてみたりし始めた。
ビショップの弓にも、十二個のくぼみがあった。

ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ、むっつ、と？プリュネル？の数を数えている。
彼の弓には、ベリエ・サジテール・ポワソン・ジェモー・ヴェルソー・カンセールに認められた証があった。
緑色、金色、水色、黄色、青色、緋色の宝石が一斉にきらめく。
「うわっ！！　俺のより、ビショップの数の方が多い！！」
「彼は精霊の巫女の血縁ですからね。エレナならば、一度で全員のものを取れたと思いますよ」
ルークは落ち込み、半泣きになっていた。
「俺、才能ないのかなあ」
「ルーク、そんなことはありませんよ。その剣は、あなたを選んだのです。あなたに才能がなかったのならば、その剣は抜けなかったでしょう」
ビショップがじろりとルークを睨んだ。
「お姉ちゃんに、卑屈になるのは駄目だっていわれたでしょ」
「う・・・・・。ごめん・・・・・」
前途多難な勇者は、小さくため息をつくのだった。

その頃、エレナはー。
比較的動きやすい、チョコレート色のドレスに着替え、食事を取っていた。かなり豪勢なものだ。今まで食べたこともない味に、彼女は目を輝かせたが、同時に太るかも、と落ち込んだ。贅沢な悩みである。
今日のメニューは、鶏肉のクリーム煮に、何の肉かわからないが、肉が入った野菜スープ。名前がわからないけどおいしい魚の焼き物。ふわふわに焼きあがったパン。鳥の丸焼き。サンドイッチに焼き菓子、熱いお茶までである。
お腹がいっぱいになり、腹ごなしに体を動かしていると、ステラが再び入ってきた。

「食器を取りに来たわ、エレナちゃん。味はおいしかった？」
「ステラさん！！　とってもおいしかったです。これって、ステラさんが作っているんですか？」
「違うわ。私は、新しく来た精霊の巫女の世話係なの。料理を作るの
は、別の子の役目よ」
「ここって、たくさん人がいるんですか？」
「ええ。何年か前から、精霊の巫女たちが来ているのよ」
精霊の巫女ってなんなんだろう。エレナはそう思ったが、ステラの顔が
ひどく悲しそうなので、口をつぐんでしまった。

ルークはビショップとともに、初の戦いに挑んでいた。
敵は、一番弱いといわれている、ハルピュイア、鳥の羽根を持つ女の顔をした魔物だった。ビショップは難なく弓で倒しているが、ルークは
飛び回る敵に翻弄されていた。この敵は、弱いのだが、ひどく素早いのだ。
「め、目がまわるうううう」
周囲をぐるぐるとまわられ、ルークはその場に倒れこんだ。
アンジェが目を手で覆い、見守っていた十二精霊が、あきれたような顔に
なっていた（約三名を除く）。
「けけけっ。愚かだなあ、この勇者」
リオンがおかしそうに笑った。
「ルーク、がんばって！！」
敵を倒しながらビショップが言う。ハルピュイアにも笑われ、腹を立てた
ルークは、ぎゅっと剣を握った。

「調子に乗るなよ、こいつ！！」
ルークが振り回した剣が、バカにして下の方にいたハルピュイアの羽根に
あたった。ぎゃあっと絶叫が響く。一体が消滅した。
「あ、初めて倒しましたわ」
ヴェルソーの目が大きく見開かれた。一瞬だけ、チカッと青色の石が光った
が、すぐに消えてしまった。
少し、ヴェルソーは感心したらしい。
最後の敵をビショップが倒し、戦闘が終わった。
「やりましたね、ルーク！！」
「初めてにしては、筋がいいと思うよ！！」
アンジェとビショップにほめられ、ルークは赤くなった。

休憩しましょうか、とアンジェが言い、何もない空間に手を入れた。
何かを探すような動作の後、彼女は風変わりなものを取り出した。
白い粉のような、雪の様な小さな結晶だ。
「マナという、食べ物です。甘いですよ」
恐る恐る二人は食べてみた。すごく甘い。幸せな気分を感じさせた。
「なあ、アンジェ」
マナを食べながらルークが聞いた。
「なんですか？」
「精霊の巫女って、なんなんだ？　あいつは、エレナに何をさせようとしているんだろう？」
「精霊の巫女は、世界の理（ことわり）を知る者です。・・・
・・・それ以上は、今は言えません。精霊界での理屈はそうですが、人間は違ったようなのです」
「違うってなにが？」
「人間は、愚かなことをしたのです。恐ろしい、恐ろしいことを、

独自の偏見でしたのです・・・・・・」
青ざめた顔で、アンジェは語り始めた。

同時刻。エレナは、陶器の花瓶の水を替えに来たステラに、とうとうこらえきれずに聞いてしまった。
「精霊の巫女ってなんなの！？」
ステラは一瞬ためらったが、彼女には知る権利があると思ったらしく、
口を開いた。
「あの方は、世界の理を知る者と言っていました。けれど、私たちの
村では、精霊祭は、生贄の儀式だったのです。村の生き神とするための、
人身御供の儀式・・・・・・」
「そ、そんな、じゃあ、私の村の儀式は間違いなの！？」
エレナは青ざめた。生贄、生き神、人身御供、その言葉が、ぐるぐると
頭の中で回転を始めていた。
「あなたたちの村では、どうだったの？」
「巫女が祭壇でまず一人で踊り、それからパートナーとダンスをするのよ。そうすれば、村が繁栄するって」
「私の場合はね、きれいな衣装を着て、踊るのは、思い出作りらしい
のよね。その後、好きな相手と踊り、生涯最初で最後のお酒を飲む。
その中には、強力な睡眠薬が入っているの。そして、埋められる」
「・・・・・・！！」
「私は死にたくなんてなかった。なのに、村人たちは私を責め立てる
のよ、もう死にたいと思うほど、ね。拷問にかけー」

「やめて・・・・・・。もうやめて！！」
聞きたくない、とエレナは耳をふさいだ。精霊の儀式は、ただ楽しいだけだと思っていた。なのに、こんなにひどいものだっただなんて。こんなに、悲しいものだったなんて。

「人身御供だってえ！？」
アンジェの言葉を聞き終わるなり、ルークはギョッとなってわめいた。
ビショップは青ざめて震えている。もし、本当に今の通りのことが、村で行われていたなら、エレナは死んでいたのだ。
「昔のことです。今は廃止されているでしょう。・・・・・・・
エレナがさらわれた城には、心に傷を残したものが大勢います。もうすぐ死ぬところを、彼に救われたものもいるのです」
「じゃあ、いいやつなんじゃん」
「違います！！　あの男は、自分のことしか考えていないのです。自分の利益のために彼は、女たちをさらったのです！！」
それ以上は、アンジェはいくら聞いても教えてくれなかった。あの男の目的も、エレナがさらわれた訳も、あの男の正体さえも。

精霊の巫女の秘密（後書き）

前回エレナの出番が少ないので、もう少し増やしてみました。ルークはまだまだ
ですが、少しずつ強くしていく予定です。

巫女の血縁

ルーク＝ウレイアは、夢を見ていた。
幼馴染の少女、エレナ＝ルクウィッドが、
さらわれる寸前の夢だ。
踊り終えた彼女が、手を差し伸べた。ルーク
がその手を取る。が、いきなり現れた謎の男に
よって、二人は引き裂かれた。
「精霊の巫女はいただいていく！！」
「エレナを返せ！！　このやろう！！」
ルークの攻撃は当たらない。エレナの悲鳴がその場に響く。
「ルーク！！」
「エレナー！！」

「エレナ！！」
夢の中でルークが叫ぶ。実際にも叫んでいたらしく、
起き上った瞬間、そばにいたアンジェが
きゃっ、と声を上げた。
「大丈夫ですか、ルーク」
心配そうに彼女は言った。とっさに手を握っていたことに
気づき、ルークが赤くなって謝る。
「ご、ごめん、アンジェ」
「いいのです、ルーク。顔色が悪いですが大丈夫ですか？」
「平気だよ。起こしちゃったか？」
「いいえ。精霊はよほどのことがない限り、眠りませんから」
ルークは手を離した。寝癖のついた髪をてぐしで整え、ベッドから
降りる。隣で寝ていたエレナの弟、ビショップが小さく身じろぎし
た。

彼らが今いるのは、ログハウスのような家だった。
アンジェが、この前のように、何もない空間から出したのだ。
家具も揃っていて、かなりすごしやすい。

「ルーク、眠らないのですか？」
「ちょっと頭冷やしてくる」
ルークはアンジェに笑いかけ、外に出た。眠れるわけがない。
あんな夢を毎夜も見ているのだ。
理由はわかっている。自分が、あの時なんでエレナを守れなかったのか、と自分で自分を責めているからだ。
わかってるけどーー。
ガンッとルークは樹の幹を殴りつけた。何も起こらない。
自分の手が痛くなるだけだ。
「エレナ……」
彼女が落とした、百花白蓮（フルール・ブラン）の髪飾りを取り出し、
ルークはここにいない彼女のことを思った。

その頃、エレナはーー。
やはり眠れぬ夜を過ごしていた。
ルークに会いたい。声を聞きたい。話したい。
その思いが、悪夢となって現れていた。
ルークが別の女性と楽しく話している夢だった。
「ルーク……」
エレナが顔を手で覆った、その時だった。
「エレナちゃん、どうしたの？」
扉が開き、ここの住人、ステラ＝ワイズがやってきた。
白くて可憐な花を抱えている。それは、百花白蓮（フルール・ブラン）だった。

本物を見るのは、初めてだ。
「ステラ、さん……」
涙でにじんだ目をこすり、エレナは無理に笑った。
この人とは、少し話しにくい。なぜなら、
嫌な思いをさせてしまったからだった。
「昨日は、ごめんなさい……」
「いいのよ。もう終わったことだから。今日は、もう一人連れて来ているのよ、エレナちゃんに紹介するわね」
ステラの後ろから、幼い少女が顔をのぞかせていた。くりくりとした
チョコレート色の目と髪。かわいらしいが、青白い肌の子だった。
「ぼくはジゼット＝ブラック。ここの庭番をやってる。あんたも、精霊の巫女なんだって？」
睨むように見られ、エレナはひるんだ。強い眼光が彼女を貫く。
「これ、ぼくの好きな花。仲良くしよう」
「え……？」
「ヤなの？　ぼくのことキライ？」
「ジゼット！！　あんたの目は誤解を招きやすいのよ。……ごめんね、エレナちゃん。この子、これでも歓迎してるのよ」
「これでもってなんだ、ステラ！！　ぼくはちゃんと歓迎してるぞ！！」
エレナは小さく笑い、ステラたちから花を受け取った。
ジゼットが上目づかいで見てくる。
「眠れないんだろ？　この花の匂いかぐと、良く眠れるよ」
幸せな気持ちになりながら、エレナはルークはどうしているんだろう、と
考えるのだった。

開けない夜はない。眠れないルークをあざ笑うように、まぶしい

朝日が
差し込んでいた。ルークはあくびをかみ殺しつつ、ビショップを軽く叩いた。
「おい、朝だぞ！！　起きろ！！」
「あえっ？　お姉ちゃん、もう朝」
「お姉ちゃんじゃねえよっ！！」
哀れなビショップは、ベッドから蹴り落とされ、すっかり目が覚めたのだった。
下に降りてみると、異臭があふれていた。
台所からだ。そういえば、さっきアンジェはいなかった。
二人が駆け付けると、泣きそうな顔の彼女が台所を片づけていた。
「ご、ごめんなさい。私、料理って初めてで」
お姫さんだもんな、とルークは思った。
「俺が変わるよ。俺一応できるから」
「ルーク、料理できたの？」
「ああ。何も考えなくていいから、よく作ってたんだよ」
ルークは手際よく料理を始めた。
数分後、さっきとはうってかわって、いいにおいがあふれる。
焼き立てふわふわのパンに、とかしたチーズやマーマレード、イチゴジャムなどが添えられている。
チキンスープもおいしそうだった。
「すごくおいしいですわ、ルーク」
「うわあっ！！　おいしいっ！！　エレナお姉ちゃんとおなじくらいおいしいかも」
「エレナの名前を出すな！！」
かっとなってルークが怒鳴った。
「ごめん……」
ビショップがしゅん、となる。そんな自分が嫌になり、ルークは何も食べずに、家を飛び出した。

アンジェたちも追ってきた。
「ついてくるなよ！！」
「おちついてください、ルーク。悩みがあるのなら、わたしたちに話してください」
「そうだよ、ルーク！！」
「うるさいっ！！」
うるさい。うるさい。うるさい。うるさい！！
ルークは顔は怒っていたが、心では泣いていた。
「何がわかるんだよ、お前らに何がわかるんだよ！！
お前らに俺の気持ちなんてわかる訳ないっ！！」
「ルークッ。わたしたち、仲間じゃないですか！！
どうして、そんなことを言うのですか」
アンジェの目が泣きそうに潤んでいる。今にも泣きそうだ。
泣かせた。自分が。アンジェを。
心の奥底では、やめろと警告を発している。
今すぐ口を閉じろと。が、ルークは怒りのままに行動した。
「仲間なんかじゃないっ！！　あんたは、ただ、エレナが、精霊の巫女が必要なだけじゃないかっ！！　利害が一致するから行動を共にしてるんだろ！！」
「っ！！」
ついにアンジェの目から真珠のような涙がこぼれおちた。
「ルーク……」
言いたいことを言いきると、頭が冷え、ルークはさっきの言葉を後悔した。謝ろうと口を開く前に、頬に痛みが走る。
ぱあんっとすごい音がした。
一瞬、ルークは何をされたかわからなかった。
あのビショップが、いきなり頬を平手打ちしたのだ。
エレナの弟にしては、かなり気弱なビショップが。
「いつまでも、ぐだぐだぐだぐだ悩んでんじゃないよっ！！

言いたいことがあるなら、はっきり言って、やつあたりなんかするなっ！！
一人で悩んでばっかいるから、爆発するんでしょ！！」
ルークはビショップの気迫に負け、後退した。
ぎらぎらと怒りできらめく目は、エレナのそれとそっくりだった。
「ってお姉ちゃんなら言うよね？　ルーク」
うううっとルークが小さく唸った。
「俺、初めてお前の事エレナの血縁だって思ったよ」
「へへへ、似てたでしょ。早く、アンジェに謝りなよ」
わかってるよ、とルークはため息をついた。
「アンジェ、ごめん。あれ、本音じゃないから。嫌な夢を見て、イライラしてたんだ」
「やっと言ってくれましたね。よかったです、本音ではなくて。私たち、仲間ですよね？」
さっきより晴れやかな顔で、ルークはうん、と呟いた。

巫女の血縁（後書き）

ルークの悩み、苦しみを書いてみました。アンジェたちともっと仲良くなります。
やっぱりこういうのは難しいですね。

精霊の剣の力

ルーク＝ウレイアは、日課となった、
剣の素振りをしていた。おさななじみの
エレナ＝ルクウィッドの弟、ビショップが
笑顔で走りこんでくる。
「ルーク！！　少し休憩したら？　てゆーか、
ごはん作ってよ～。ぼくもアンジェも出来ないんだから～」
「わかったよ、ビショップ」
ルークは自分で作った革製の鞘に、銀色にきらめく剣をおさめた。
伸びをし、歩き出す。隣にビショップが並んだ。
「まだ、嫌な夢、見る？」
「いや、見てないよ。ビショップたちのおかげだよ、ありがとう」
ログハウスに帰ると、精霊の姫・アンジェが出迎えた。
「おはようございます、ルーク」
「おはよう、アンジェ！！」
ルークはあいさつをし、台所に入って行った。
ふんだんにある材料を使い、なんともおいしそうな料理を作っていく。
今日の朝ごはんは、チキンスープにチーズ入りの蒸しパンだった。
デザートには冷たいチョコレートが添えられてある。
歓声を上げて料理を食べる二人の姿に、ルークは小さく笑った。

エレナは今日も軟禁生活を満喫していた。
友人のステラ＝ワイズと、ジゼット＝ブラックが部屋に来ている。
誘拐したあの男は、まだ顔を見せてもいなかった。
ステラたちに聞いても、聞かされてないから、とか、言うことが
許されてない、とか言われて容量を得ない。

少し太ったかもしれない、と思う今日この頃のエレナなのだった。

「やあああっ！！」

気合のこもった声がその場に響く。ルークの一閃で、一体のモンスター

が消滅した。少しずつ強くなっていっているらしい。ハルピュイアくらいな

ら、すぐに一体は倒せるくらいになっていた。

まだ精霊の剣は宝石が二つだった。

「ルーク、その剣を少し貸してくださいませんか？」

アンジェが手を差し出しながらそう言った。

首をかしげながらも、ルークは剣を彼女に渡した。

「精霊の剣の本来の力を見せます」

ビショップに下がっているように言うと、アンジェはスッと剣をハルピュイアへと向けた。

「全地をすべる精霊たちよ、我の前に集え！！」

リオン・ジェモー・ベリエ・サジテール・ポワソン・ヴェルソー・カンセール・スコルピオン・カプリコルヌ・ヴィエルジュ・トロー・バランスがその場に現れた。

彼らが一つとなって剣の宝石、？プリュネル？に吸い込まれていき、虹色の光を剣が発した。

「行きます。　・・・・・・闇を祓（はらい）いし力

となれ！！　浄化の光、百花乱舞（フルール・ゼフィール）！！」

ズバアッと剣気がハルピュイアの前から後ろにかけゆけた。

声を上げる暇もなく、モンスターは切り刻まれた。

あとには塵も残らない。言葉通り、浄化されたようだ。

へたりこんだルークは、小さくすげえ、と呟いた。
ビショップは木の陰に隠れてしまっている。

「これが精霊の剣の本来の力です」
アンジェはルークに銀色の剣を返した。次に、
ビショップを見やって言う。
「あなたの弓でも同じです。すべての精霊と
心かよわせなければ、その真価は発揮できないのです」
ルークたちは頷いた。すべては、エレナのため。
彼女を、あの男から取り返すために。
「よーし、もう一回だ！！　次の敵に行くぞ！！」
「待ってよ～、ルーク！！」

次のターゲットは、スキュラという、美しい女性
の姿をしたモンスターだった。ただし、下半身が
魚のもので、腹部に犬の首が六つついている。
水辺の近くに住んでいた。
「ルーク、ビショップ！！　スキュラはハルピュイア
よりも強いですよ、気をつけて！！」
「わかってるよ、アンジェ！！」
「けがしないようにがんばるよ！！」
二人はそれぞれ、剣と弓を構えた。
襲い来るスキュラの攻撃をかわし、
攻撃を打ちまくる。
ルークがスキュラに弾き飛ばされ、
空中を舞って精霊二人に助けられた。
ありがとう、と声をかけ、再びスキュラに向かう。

がー。スキュラは水の中に飛び込み、姿を消してしまった。

「なんだよ、まだ何もしてないのに」
「ボクの攻撃もあたってなかったよ」
アンジェの顔がひどく青ざめていた。
「ルーク、剣を貸していただけますか？」
「また？　ああ、いいけど」
アンジェはぎゅっと剣を強く握っていた。
体が小刻みに震えているのに気付き、二人が声をかける。
「大丈夫か、アンジェ？」
「どうしたの？」
「あの男が、あの男が、来ます」
「「え？」」
ふっ、と姿を現したのは、あの時、エレナをさらったあの男だった。
カッとルークの頭が真っ白になった。
気が付いたら、奴に飛びかかっていた。
もちろんかなう訳はなく、吹っ飛ばされて木の幹に背中を打ち付ける。
ビショップも攻撃をしたが、同じ目にあった。
「アンジェ、私のもとへ来い。お前では私には勝てない」
「嫌です！！　あなたこそ、あきらめて、エレナを、精霊の巫女を解放しなさい！！」
「相容れぬか」
少しだけ、男の目が悲しみに染まった。
キッとアンジェは黙って睨みつけている。

「ならばいたしかたない」
ごおおおおっと力の塊が押し寄せてきた！！
アンジェは剣を構え、結界を張る。
二人の戦いを、ルークたちはただ見ている
しかできなかった。

精霊の剣の力（後書き）

ついにあの男がルークたちの前に再登場です。
あの男の正体は、徐々に明かして行きます。

裏切りと悲しみ

「きゃあああああっ！！」
悲鳴がその場の木々を震わせる。
銀色の剣から、アンジェ様！！と
声が上がった。結界は役には
立たず、すぐに破られた。
精霊たちがパアッと一斉に散る。
剣から解放されたのだ。
「アンジェ！！　大丈夫か！！」
「今、癒すからね」
ルークとビショップが慌てて駆け寄った。
キッとアンジェが睨みつける。
「来ないで、来ては駄目！！」
「ほう。まだ奴らをかばう余裕があるのか」
アンジェは今度は男の方を睨んだ。
「勇者と巫女の血縁には手を出させません」
「それはお前次第だな」
「やあああああっ！！」
気合一閃、アンジェが銀色の剣を振りおろした。
精霊の力が宿っていなくても、普通の武器より
威力はあった。が、フッと笑うと、男はそれ
を余裕でかわした。

「アンジェ、よけてよ！！」
ビショップが銀色の弓をかまえた。狙いを
男に定め、打つ。
「駄目ッ！！」

アンジェが叫んだが、もう遅かった。
矢はすでに放たれている。
男が手を挙げてそれを止めた。
空中に矢が静止する。ビショップが青ざめた。
ルークが彼をかばおうとし、巻き込まれる。
「やめて！！」
アンジェの制止は届かない。
男はそれを解放した。
「「わあああああああっ！！」」
二人は返された矢に服の袖を貫かれ、木の幹に
体を縫いつけられた。魔力も込められていたらしく、
動くことができなくなる。
「ルーク！！　ビショップ！！」
「人のことより、自分の心配をするんだな、アンジェ。
暗黒閃光（ノワール・クラルテ）！！」
アンジェの胸に黒き光が吸い込まれていった。
彼女の体がびくり、と跳ねる。
たとえようのない痛みが体の中をかけぬけていった。
「うあ、うあああああああっ！！」
絶叫の声を上げ、彼女はかくり、と気絶した。
男が今度は二人の方にやってくる。
キッとルークは男を睨み、ビショップは泣きそうな
顔になっていた。
「来ないで、来ないでよ！！」
「ちくしょう！！　ちくしょう！！　ちくしょ・・・・・う」
ビショップは泣きながら、ルークは悪態をつきながら、
攻撃をされて意識を手放した。

ルークたちが危機に陥っている、その頃。

エレナは今日も監禁生活を満喫中だった。
ジゼット＝ブラック、ステラ＝ワイズの他に、
料理番のミルカ＝ライニオまで加わって、
かなりかしましくなっていた。
テーブルにはお菓子の数々があり、四人は
おしゃれの会話に余念がなかった。
と、いきなりステラが会話を遮った。
「エレナちゃん、少しいいかしら」
「どうしたんですか、ステラさん？」
「ちょっと来てくれる？　大事な話があるの」

ステラはエレナを連れ出し、自室へ連れて行った。
初めて部屋から出れた解放感にひたっていたエレナは、
ステラの目に険があるのに一切気付いていなかった。
にっこりと笑うと、ステラは口を開いた。
「エレナちゃんに良い事教えてあげる」
エレナは何故か背中がゾッとしていた。
頭の中で危険信号が鳴り響く。ここにいては駄目だ。
早く自室に帰れ、と。
だが、ステラはしっかりと腕を掴んでいて、
離してくれる気配はなかった。
「私、あなたが大嫌い」
一瞬、何を言われたのかわからなかった。
大嫌い？　ステラさんが？　私を？
何かの冗談だと思いたかったが、彼女の
顔にはもう親しみは欠片もなかった。
「もう一度言ってあげましょうか？　私、
あなたが大嫌いなの」
「ど、どうして！？」

「私、あなたみたいな幸せな子って大嫌い。
愛されて当然だと思ってた？　いい子ちゃんの
エレナちゃんは」
悪意のある言葉がエレナの胸を深くえぐった。
ぼろぼろと目から涙がこぼれおちていく。
「ステラさん・・・・・・」
「何であんたなの？　あんたばかり愛されて
慕われて。私は、あの子たちと仲良くなるの
に時間がかかったのに！！　なんであんたばかり
が幸せなのよっ！！」
「・・・・・・！」
だんっ、とステラが壁を叩いた。びくっ、とエレナ
は身をすくめる。それがさらに、彼女の怒りに
油を注いだ。
「あんただってあたしのこと嫌いなんでしょ！？
　しらじらしい敬語とさんづけなんかしちゃってさ！！
あんたが来なければこんなにみじめになんか
ならなかったのに！！」
ステラは気づいていなかった。この言葉が、エレナを
責めることが、さらに自分をみじめにしていることに。
ただ感情のままに、罪もないエレナを責め立てていた。
「あんたなんか、死んじゃえっ！！」
そのままエレナは走り出し、その場から逃げだした。
ステラが泣いていたことも、それを一人の少女が
見ていたことも知らず、自室の前の扉に寄りかかって
すすり泣いていた。
愛しい人の名前を小さく呼びながら。

裏切りと悲しみ（後書き）

エレナがステラに裏切られる話です。このまま二人が友人に戻れるかは、エレナにかかっているので、がんばって書きたいと思います。

森の中の生活

「ちくしょう！！」
男は悪態をつきながら剣をふるっていた。
ルークたちを殺すことができない。
彼らは、それぞれの武器に守られていた。
正しく言えば、精霊たちに。
男は舌打ちすると、その場から姿を消した。
勇者と巫女の血縁は消せなかったが、アンジェの
力は封じることができたので、彼は一つは目的
を達成できたのだった。

ルーク＝ウレイアが目覚めたとき、精霊の姫
アンジェは、うずくまったまま、ぴくりとも
動かなかった。まるで死んでいるかのように。
「アンジェ！！　アンジェ！！　大丈夫か！？」
ルークが揺り動かすと、彼女はううっ、と苦しげに
呻いた。胸に手をあて、かきむしるような動作を
している。目覚める気配はなかった。
とりあえず、ルークは彼女を、大きな木の下に
寝かせた。アンジェが倒れた後、彼女がどこからか
出したものたちは、あとかたもなく消えていたのだ。
ビショップ＝ルクウィッドも倒れていたが、こちらは
安らかな寝息が聞こえたので、放っておく。
ビショップの姉、エレナがさらわれた際に落とした、
百花白蓮（フルール・ブラン）の髪飾りを取り出して
ながめ、ルークは歩き出した。

彼がいつものように素振りをしていると、ビショップが走り寄ってきた。一旦手を止め、振り向く。
「ルーク！！」
「ああ、ビショップ。起きたのか？」
「アンジェ、どうしたの？　苦しそうで、全然起きないよ」
ビショップの淡い緑の目に涙がたまっていた。
しゃくりあげ、彼はルークに抱きつく。
ルークは仕方なく、剣を地面に置いて彼を抱きしめた。
「アンジェが死んだら、いなくなっちゃったらどうしよう……。僕、やだよ、そんなの……」
「大丈夫だよ。アンジェがそんな簡単に死ぬ訳ない。あいつは、精霊の姫さんだぜ？　そんなやわじゃないよ」
「う……でも……」
「アンジェを信じろ！！　アンジェは、アンジェの力はあんなやつになんて負けない！！　そうだろ？」
こくり、とビショップは頷いた。ごしごしと目をこすり、彼の目を覗き込む。その目は決意に満ちていた。
「僕、ルークと一緒に訓練するよ！！　自分では強いつもりだった……だけど、あの男には全然歯が絶たなかった」
「うん、一緒にがんばろうぜ！！　でも、その前に……」
ぐうううううっ、と二人のお腹からけたたましい音が聞こえた。
彼らはどちらからともなく、照れて笑いながら言った。
「腹ごしらえ、だね」
「そういうことだ」
きらきらと彼の目が輝きだしていた。楽しそうだ。
「さあっ、食料探索に出かけるぜ！！　アンジェが起きたら、おいしいもの食わせてやりたいからさ」
「る、ルーク、何でそんなに楽しそうなのさ～！！」
ビショップのひるんだような声をしり目に、ルークは張り切って

森の中に飛び込んで行った。

エレナ＝ルクウィッドは、今日一日、親友のステラ＝ワイズと口をきいていなかった。彼女は、エレナのことを親友だなんて思っていなかったのだ。エレナが、勝手に親友だと思っていただけなのだ。ステラはエレナのことを疎んでいた。

「どうした、エレナ？」

庭番のジゼット＝ブラックが不審そうな顔をしていた。エレナは首を振ってなんでもない、と言い返す。

「ステラとなんかあったか？」

「え！？」

「口きいてないだろ？」

「ジゼット、不謹慎だよ」

料理番の少女、ミルカ＝ライニオが、怖い顔でジゼットを睨みつけていた。ジゼットが舌を出し、言い合いになる。

エレナは少しホッとした。彼女のことは、二人には話せない。これは二人の問題だ。それに、告げ口をするみたいで言いたくない。そんなことをすれば、彼女は二度とエレナの顔も見たくなくなるだろう。

エレナは彼女を想い、どうやって仲直りをしようか、と考えるのだった。

一方、ルークとビショップは、まだ食料探索の真っ最中だった。分かれて探している。

ルークの方は、かなりの食材を手にしていた。きのこ数本、食べられる木の実数個を大事そうに胸に抱きかかえている。彼は食べ物に関してはとても詳しいのだった。

「あとは、肉か魚でもほしいかな。これじゃあ足りないかもな」
　ぐううううっ、と再び腹の虫が鳴く。
ルークは一旦きのこなどを置くと、流れていた川に飛び込んで魚を次々と掴んでいった。
「あ～、楽しい！！　つめてえ！！」
　十匹近く捕まえると、彼は上機嫌で食料を抱えて戻って行った。

　ビショップはさんざんな結果に終わっていた。
リスの姿をしたモンスターに、見つけた木の実を取られたり、魚に馬鹿にされて、全然取れなかったり、あげくのはてに、モンスターに川に投げ込まれてずぶぬれになったりと本当にさんざんだった。
　ルークのところに戻り、彼が海の幸山の幸を大量に取っているのを見て、さらに打ちのめされる。
「ルーク、ごめん、全然駄目だった……」
「いいよ、誰にでも得手不得手はあるんだからさ。ビショップは自分にできることを頑張ればいいんだよ」
「ありがとう、ルーク……」
　ビショップは、ルークが取ってきて料理した食事をしながら、お姉ちゃんがルークを好きになった理由、分かる気がするな、と思うのだった。

森の中の生活（後書き）

ルークの取り柄が大活躍の一作です。
エレナはまだ仲直りのスタート地点
ですね。徐々にまた仲良くしていきます。

新たな出会い

ルーク＝ウレイアは今日も剣の素振りをしていた。
銀色の剣は、輝きが曇ってしまっている。
精霊たちがいないからだな、とルークは思った。
精霊たちに認められた証の石、
？プリュネル？も光がなくなっている。
「ルーク！！　アンジェがまだ目覚めないよ！！」
おさななじみのエレナ＝ルクウィッドの弟、
ビショップが走りこんできた。ぶつかりそうになり、
慌ててルークがよける。
「気をつけろよ！！　……アンジェの様子はどうだ、ビショップ？
苦しそうか？」
「ううん、それはもう大丈夫みたい」
「それだけでも進歩だな」
ルークは伸びをし、剣を鞘におさめた。優しく彼の肩を叩く。
「ごはんにするか？」
「うん……」
彼らは、木陰で眠る少女をちらりと見てから、
歩き出した。

その頃、エレナ＝ルクウィッドは、軟禁されている部屋で
一人だった。今日は白いふんわりとしたドレスを着ていて、
一段とかわいらしく見える。差し入れられたチーズケーキ
なるものを食べながら、彼女はルークとステラのことを
考えていた。友達は今日は一度も部屋を訪れていない。
エレナが訪問を断ったのだ。考え事をしたいから、と。
「ステラ……ルーク……」

考えているうちに睡魔が襲ってきて、エレナはすぐに
夢の世界へと旅立った。

同じ城の、別室。暗い暗い部屋に、一人の少女がいた。
腰よりしたまで伸びた、長くて美しい金髪が、明かり代わり
のようにきらめいている。
少女の顔は、とても美しかった。憂いがある分、つねよりも
美しく感じる。美しい雫が少女の目できらめいた。
「止めなくては……あの人を……あの人を……」
少女は誰もいない部屋で、一人泣きながら悩むのであった。

同じころ、ルークたちは食事を取っていた。
ルークが仕留めた鳥の魔物（ハルピュイア）
ではない、をたき火で焼いて、串にさして
食べている。チーズがあればな、と彼がぼやいた。
「仕方ないよ、こんなところに乳製品なんかないもんね」
「わかってるよ、ビショップ。早く食べて訓練するぞ」
「う……うん……」
ためらいもなく食するルークとは違い、ビショップに
は少し食べにくかった。彼は肉を食べたことはあるが、
元は生きていたもの、という実感はなかったのだ。
生きていた命を奪わなくては、人は生きていけない。
そのことは十分わかってはいるけれど、ためらいはあった。
「ねえ！！」
いきなり声が聞こえたので、二人は驚いて振り向いた。
そこには、薄汚れた恰好（かっこう）の女の子がいた。
猫のような大きな目を見開き、じいっ、とビショップの

手元に目を落としている。お腹がすいているようだった。
「食べないなら、それ、あたしにくれないか！！
もう三日も食べていないんだ！！」
「え、ええ！？　いいけど……」
少女はひったくるようにビショップの肉を取り、じつに
気持ちのいい食べっぷりで瞬く間に平らげてしまった。
物欲しそうに、ルークの分の肉も見ている。
ルークは声を立てて笑い、予備で焼いていた分を
全部少女に渡した。それをすべて食べ終わった少女は、
すっかりお腹がふくれたらしく、満足そうに息をついた。
「ああ、お腹いっぱい！！　ありがとう、君たちは恩人
だよ！！　？迷いの森？で迷って三日！！　死ぬかと思ったよ！！」
にっかりと笑う少女の顔は、土で汚れてはいたが、
とてもかわいらしかった。ルークたちも笑い返す。
「ん？　ちょっと待てよ、迷いの森？」
「そうだよ！！　ここは、一度入ったら出られない、おっそろしい
森なんだぞ！！　君たちは何日かかった？」
ビショップは首をかしげた。二人は、まったく迷うことなく森
を出ることができたのである。だが、少女が嘘を言っているようにも
見えなかった。口調にも、恐怖がにじんでいる。
「俺たち、迷わなかったぜ？」
「嘘だろおおおおっ！？」
あんたら神様！？　と少女は大きな目をさらに大きく見開いた。
ルークたちは困ったように肩をすくめる。
「これのおかげかな、ルーク？」
銀色の弓を触りながらビショップが言い、ルークも銀色の剣を
ながめた。これは、精霊の姫と精霊たちの加護を受けた証である。
きらきらと目を輝かせ出した少女に、ルークたちは事情を
説明したのだった。

新たな出会い（後書き）

新キャラを登場させました。
二人とも気の強い方では
ないので、かなり気の強い子
の予定です。最初は猫かぶっていますが。

目覚める精霊の姫

ルークたちは、カストルと名乗った少女
に案内され、彼女の住んでいる村に来ていた。
カストルはのべつもなしにしゃべっていたが、
ルークたちは笑顔でそれを聞いていた。
おしゃべりな女の子は、エレナで慣れていたのだ。
「あ、ついたよ。おしゃべりはここまでだね」
少女が立ち止った。ルークは背に負ったアンジェを
背負い直しながら、笑顔になる。
ここは、小さな酪農村・ラクレット。
お礼に家の乳製品をごちそうする、と言われていたので、
ルークはかなり上機嫌だった。ルークほどではないが、
ビショップもどこか楽しそうだ。
「ただいまあ～」
何事もなかったかのように村に入っていくカストル。
三日もいなかったのに。とゆうか、『カストルをしのぶ会』
とかいう垂れ幕が張ってあったが、スルーして歩いて行った。
「なあ、カストル？」
「なあに？」
「お前、死んだことにされてないか？」
「だから、命の恩人って言ったじゃん。
一度迷いこむと、あそこは一生出れないって
言われてるんだってば」
カストルはきっぱりと言い切った。特に気にしてはいないらしい。
オレだったらかなりショックだな、とルークは思った。
『カストル！！』
村人たちが一斉に駆けてきた。どの目にも、涙がたまっている。
カストルは村人全員に愛された娘だった。

「みんな、心配させてごめんね、あたし、ちゃんと帰ってきたから！！」
カストルは母親と父親と思われる人に抱きついた。
妹らしき子と、弟らしき子が腕に掴まっている。
「あの人たちが助けてくれたんだよ！！」
全員の目がルークたちの方に集中する。
二人は顔を赤らめてうつむいたのだった。

それからルークたちは大変だった。
「命の恩人！！」だの「神の使い！！」だのと
言う人たちをなんとかなだめ、カストルの家
にたどりついたのだ。アンジェはカストルの
貸してくれたベッドに寝かせた。
「さあ、どんどん食べてよ」
ドドン、とさらに山盛りの乳製品が皿に
乗って出てきた。かなりおいしそうだ。
「こんなものしかないですが」
優しそうなカストルのお母さんが苦笑している。
だが、ルークは好物を前にして目を輝かせていた。
「いえ、これで結構です！！　オレ、チーズとか
好きなんで！！」
「とてもおいしそうですよ」
二人は早速食べ始めた。とろけたチーズをパンに
塗り、たっぷりのミルクでいただく。
それは今までで食べたこともない味だった。
独特のくさみもあまりない。新鮮な乳製品の
おいしさを、ルークとビショップはこころゆくまで味わった。
カストルは笑顔で給仕をしていて、これはこういう名前、
とか、これはあたしが作ったのよ、とか教えてくれて、

食事はかなり楽しいものだった。
その時ーー。
「お客様が、お目覚めになりましたよ！！」
一旦様子を見に行ってくれていたカストルの母が、血相をかえて走ってきた。ルークたちも慌てて走っていく。カストルがその背を追いかけた。

「う……ここは……」
アンジェは目をパチパチと瞬(またた)かせていた。
バサリ、と体にかけられていた羊毛の毛布が落ちる。
驚いたように、女性が後退した。
それから、ホッとしたように笑う。
「よかった！！　お目覚めになったんですね！！」
「ここは……どこ、なのですか……」
アンジェはよわよわしい声でたずねる。
女性はこころよく教えてくれた。
「ここは酪農村のラクレットですわ。今、お二方を呼んでまいります！！」
しばらくして、ルークとビショップが部屋に駆けこんできた。後ろには、かわいらしい少女もいる。
「アンジェ！！　よかった！！」
ビショップは涙目でアンジェに抱きついた。
ルークは泣きはしなかったが、ホッとしたように方をなでおろしていた。にっこりと少女が笑う。
「あなたアンジェっていうのね、あたし、カストル。よろしくね！！」
「あ、はい……よろしくお願いします」
アンジェはあいまいに笑っていたが、その場の全員が

目をそらした時、悲しい目をしていた。
ここは、アンジェにとって思い出深いところなのだ。
この少女も母親も、アンジェのことは知らないだろうが。

アンジェは恐縮しながら食事をいただき、カストルの
汚れのない笑顔で癒された。自分の力を確認し、力が
あまりないことを知る。これでは、ルークたちの足手まとい
も同然だった。
「私は、もうルークたちとは共にいけません」
「どうしてだよ、アンジェ！！」
「あの男と戦った際に、力を封じられました。足手まとい
ですから、どうぞどこかに置いていってください」
ルークたちは迷うように目を泳がせた。
カストルが提案をする。
「じゃあ、ここにいればいいよ！！　ずっと倒れてたんでしょ？
そんな人をどこかに放っておくなんで、駄目だよ。
ね、お母さん？」
「ええ。狭い家ですが、どうぞいつまでもいてくださいな」
アンジェはすまないと思い断ろうとしたが、二人はかなり
強情でついには了承してしまった。
そして、次の言葉にルークたちは目を丸くした。
「あたしも、ルークたちについてく！！　これでも強いんだよ～」
「そんな、女の子を巻き込むわけにはいかないよ！！」
「男女差別はよくないよっ。あんたに命救われなきゃ、
あたし死んでたもん、恩返しさせてよ～」
アンジェでさえ敵わなかったのだから、元々口ベタなルークが
勝てるわけはない。結局カストルに打ち負かされた。
「カストル……こちらに……」
アンジェが真剣な顔で言った。手招きされたので、彼女が

向かっていく。パアアッ、と虹色の光が散る。
それが晴れると、カストルの腕に銀色の籠手(こて)が輝いていた。ルークたちと同じくぼみが十二個ある。
「うわあ、きれーい」
「あなたなら使いこなせるハズです。がんばってくださいね」
「「「行ってきます」」」
三人は笑顔で村を出て行った。差し入れとしてもらった乳製品やパンを大量に荷物におさめながら。
彼らは知らなかった。笑顔で三人を見送ったアンジェが、力の使いすぎでまた倒れたことを……。

目覚める精霊の姫（後書き）

今回はエレナの登場がありませんでした。
次回も多分ありません。
新キャラが出た分、彼女の出番は
減りますが、絶対に次回の次回は
出しますので見てください。

精霊の巫女の妹

ルーク＝ウレイアは、
ビショップ＝ルクウィッドとカストル
と共に、森の中を歩いていた。
？迷いの森？とは別の森である。
カストルは歌を歌いながら歩いていた。
きれいな歌声である。まるで、澄み切った鈴の音の
ような。ルークとビショップは歌に聞き入りながら
歩いていた。
「カストルってさ、お姉ちゃんに少し似てない？」
こっそりとビショップがそう聞いてきた。
確かに、カストルの性格はエレナにとても
よく似ていた。容姿は似ていないけれど。
「そうかもな……」
「何こそこそやってんの、二人とも？
あたしの悪口言ってるんじゃないよね？」
ギロリと睨まれ、二人は震えあがった。
「「め、めっそーもございません！！」」
思わず声がかぶるルークとビショップだった。
笑顔に戻ったカストルは、彼らにも歌う
ように要請した。ビショップは苦も無く歌い出す。
が、ルークは赤くなって黙りこんでいた。
「ルークは？　ビショップは歌ったよ」
「……カンベンして。オレ、歌苦手……」
「ええ～。ルークの歌、聞きたいよ～！！」
聞きたい聞きたいとカストルがせっつく。
ルークはそのたびに涙目で嫌だ、と
わめいていたが、あたしの言うことがきけないの？

と脅され、仕方なく歌った。
なんとも調子っぱずれな、下手すぎる歌が
その場に流れた。しん、と森に静寂が訪れる。
かわいらしい声で歌っていたビショップも、
驚いたように口をあんぐり開けていた。
「だから、嫌だって言ったのに……」
こっそりとルークは泣いたのだった。

「魔物っ！！」
カストルがそう叫んだ時、ビショップは
いじけるルークをなぐさめている最中だった。
何もいないじゃん。
そう思った時、五体もの魔物が飛び出してきた。
「うわあああああっ！！」
「げっ！！　魔物！？」
ビショップは悲鳴を上げ、ルークも立ち直って
銀色の剣を構えた。
カストルはもう攻撃をしている。
女の子にしては重い拳が、飛び出してきた
狼の魔物を吹っ飛ばした。
だが、魔物はすぐに戻ってきて、
カストルを体当たりで薙ぎ払った。
「きゃあっ！！」
「「カストルッ！！」
魔物の鋭い牙が、カストルの細い首筋
に突き立てられようとしていた。
別の魔物に邪魔をされ、ルークたちは
その場に行くことができない。
とーー。

虹色の光がそれぞれの武器、剣、弓、籠手
から放たれた。すると、そこに現れたのは、
十三体の精霊たちである。
「ルーク、アンジェさまを守ってくれてありがとう、
少しは見直しましたわ」
水の精霊・ヴェルソーがにこりと笑い、
剣に青色の？プリュネル？が光った。
「勘違いすんなよ、少し力を貸してやるだけだからな」
双子の姉妹の妹の方も、素直じゃないセリフを
言いながらも、ルークを認めたらしい。
きらきらと緑色の宝石も輝いていた。
これで、ルークの剣の宝石は四つになった。
ビショップは、ベリエ・サジテール・ポワソン・
ジェモー・ヴェルソー・カンセールと、六つのまま
変わらない。そして、カストルも同じ数だった。
彼女は、精霊に力を貸してもらって、
その場をしのいだ。狼が悲鳴を上げ、消滅する。
「カストルって、ひょっとして、精霊の巫女と
関係があるのか！？」
驚いたような顔でルークが言うと、カストルの
かわいらしい顔が曇った。
飛び出してきた魔物を、小さな拳が吹き飛ばす。
「あたし、精霊の巫女の妹なの。お姉ちゃんは、
もう死んじゃった」
「ごめん……」
「謝らないで！！　余計に苛立つから！！」
怒鳴られてルークは押し黙った。
剣を一閃させ、魔物を切り捨てる。
ここの魔物は、精霊の力さえあれば
特に苦労しないようだった。

「よーし、フィニーシュッ！！」
最後のとどめをさしたのは、
カストルだった。さっきの顔が
嘘のように、晴れた空のような顔
になっている。
ルークもビショップもいたたまれなくて。
口を閉じていた。そんな態度に苛立ったのか、
カストルは気にしないでね、と言い置いて
姉のことを話し出した。
「お姉ちゃんはね、とってもやさしい人
だったの。精霊の巫女って、ほとんどが
命令されたひとだったんだけど、
お姉ちゃんは違ったんだよ」
チーズをたっぷりと塗った、あぶった
パンを頬ぼりながら、カストルは
あいまいな笑い方をした。
同じものを食べながら、ルーク
たちはそれに聞き入る。
「お姉ちゃんは、自分から生贄になったの。
でも、生贄になったのに、村は破壊されちゃったん
だって。それから、うちの村では儀式はやって
ないみたい」
カストルは語り終えた時、悔しそうな、
憎らしそうな顔になっていた。
姉の死が、無駄にされたようで
嫌だったのだろう。
ルークたちはしばらく口をきかなかった。
やがて、カストルが焚火（たきび）に砂をかけて
消し始める。ルークたちも手伝った。
「ごめんね、気を使わせちゃって。こんな話、

迷惑だったよね」
二人は首を振った。これまでの事情を
彼女に話し始める。
カストルは黙って聞いていた。
「がんばろうね、お姉ちゃんは助けられなかった
けど、ビショップのお姉さんは助けられる！！
あたしも、協力するからね」
それぞれの事情を知った彼らは、
もっと仲が良くなったのだったーー。

精霊の巫女の妹（後書き）

次回はようやくエレナの
再登場を書きます。
また新キャラも出てきます。
次回もぜひ見てください。

精霊の巫女の決意

エレナ＝ルクウィッドは、
いつもの部屋でいつもの目覚め方
をした。銀のお皿にたたえられた
水で顔を洗い、ついでに手を洗う。
「よしっ！！」
顔を軽く叩いて気合を入れる。
「食事……」
音も立てずに彼女の後ろに立った
少女が、低めの声でポツリと言った。
まるで幽鬼のように陰気な雰囲気だ。
「きゃあああああああああっ！！」
思わずエレナは悲鳴を上げ、
文字通り飛び上がってしまった。
少女は驚いた様子もなく、
サイドテーブルに料理の盆を置く。
人形のように無表情だった。
「あなた、誰……？」
「リエンカ……」
それ以上は口を開かない。
なんとなく名前がそれ
だというのが、エレナはわかった。
「食事……」
「あ、あなたが持ってきてくれたのね、
ありがとう、えっと、リエンカ？」
こっくりと彼女は頷く。
よく見ると、盆には二人分の
料理が載せられていた。

リエンカも、一緒に食べるのだろうか。
今日のメニューは、
ハチミツのたっぷりとかかったワッフル
と、チーズが載せられたトースト、
カモミールティーだった。
「あなたも一緒に食べるの？」
「駄目？」
「ううん、一緒に食べたいわ」
今回の食事は、ひどく静かに
始まって終わった。リエンカは一言も口をきかず、
エレナも口をきくのが気まずくなったのだ。
「ステラ、あなた、ケンカ……私、見た……」
エレナはギョッとなった。
ステラとの言い合いを、見ていた人が
いたなんて。少女が今までで一番しゃべったのも
驚いたが、それ以上の衝撃だった。
「見てたの！？　誰にも言わないで！！」
「ん……」
またリエンカがこっくりと頷く。
「ステラ、私、友達……」
「そうなの……あ、あなた私の名前
知らないのよね？　私エレナっていうのよ」
「エレナ……」
リエンカは何度かエレナの名前を呟き、
口元をゆがめた。それが笑顔だと気づき、
エレナは笑い返す。
鮮烈なる笑顔だった。
確実に、にっこり、ではなく、
ニヤリという表現が似合いそうだ。
表情を出すのになれていないのね、

とエレナは思った。
ふと、疑問を抱く。
「リエンカって、鍵を開ける時、
音を立てないのね。私、驚いたわ」
「鍵、いらない……。私、瞬間移動……」
彼女の話を整理すると、リエンカは
瞬間移動能力があるらしいとのことだった。
さっき部屋に入った時も、自分の部屋から
直接来たのだと言う。
「ステラ、部屋、行く？」
「え……？」
エレナは迷った。ステラの部屋に行く？
これから？　リエンカの顔を見るが、
少しも表情は変わっていなかった。
「エレナ、ステラ、仲直り……」
彼女には一切の悪意は感じられなかった。
純粋に、善意だけがある。
このままではいけないのは確かなので、
エレナはこくりと頷いた。
リエンカが口をゆがめ、エレナの手を掴む。
次の瞬間、二人の姿は部屋から消えていた。

ステラ＝ワイズは、部屋で一人でいた。
食事には手をつけず、ベッドに倒れ込んでいる。
具合が悪いのではないようだったが、
だるそうに目を閉じていた。
と、何かの気配を感じた。
リエンカだろうと思い、体を起こす。
そこに、エレナ＝ルクウィッドの姿を
認め、ステラはギョッとなった。

「リエンカ！　何のつもり！？」
「エレナ、ステラ、仲直り……」
「余計なお世話よ！！」
エレナは勇気をふりしぼってステラに近づいた。
ステラは一瞬目を見張ったが、移動はしなかった。
「何の用？　仲直りなんかしないわよ。
私は、あんたが大嫌いなんだから」
「仲直りなんて、できる訳ないよ。
私は、ステラの友達じゃなかった」
ステラは眉をしかめた。仲直りする気はない。
そう言うのならば、何をしに来たのだ。
「私、ステラのこと知らなすぎたんだよ。
ステラのこと、聞こうともしなかった。
でも、これからは知って行こうと思う……」
「何なのよ、どういう意味なの？」
「ステラ、私と、友達になろう！
今までの関係には戻れないけど、
友達になろう！！」
ステラは黙っていた。
友達？　私と友達に？
心が浮き立つのを感じる。
何故か、嬉しい。
「う……」
思わずうん、と言ってしまいそうになり、
ステラは慌てて口元をおさえた。
危ない！　これがこの子の手なんだ。
皆を取り込んだ、あの子の手口なんだ。
そう思うと、すごく腹が立った。
皆を取り込んで仲良くなったくせに、
今度は私をも取り込もうとしている。

自分を魅了しようとするエレナが、
ひどく苛立たしかった。
だが、それ以上に嬉しさも感じている。
と、コツコツと靴の音が聞こえてきた。
ステラはキッとなって叫ぶ。
「あんたなんか、嫌いよ！　大嫌い！！
出てって！！　出てってよ！！」
泣きそうになりながら、ステラは喚いた。
こう言わなくてはならない。
嘘でも、こういうことが今はつらかった。
「ステラ……」
リエンカが声をかけ、手を伸ばしてくる。
ステラはその手を振り払った。
「今度は余計なことしないで。この女のことは、
あんたなんかに関係ないんだから」
リエンカは黙ってエレナの手を取った。
再び、エレナたちは部屋に戻ってくる。
「私、ステラに嫌われてるのね……」
エレナは気づいていなかった。
ステラの部屋に、黒衣の男が
歩み寄っていたのを。
ステラに、思ったより嫌われていないことを。
ステラに、かばわれたということを。
さっき、エレナが見つかっていたら、
あの男にどんな目にあわされるかしれなかった。

「さっき、誰かいなかったか？」
「リエンカです。瞬間移動ができるあの子。
私たち、ケンカしたのですわ」

黒衣の男が帰っていく。
ステラはホッとして、胸をなでおろした。
「もう、来ないでしょうね……」
悲しげにつぶやく。
自分から拒絶しておいて
虫がいいとも思ったけれど、
ステラはエレナがもう一度
来ることをのぞんでいたのだったーー。

精霊の巫女の決意（後書き）

新キャラ登場です。
エレナも再登場です。
エレナが動き出しました。
ステラはまだ迷っています。
ですが、仲直りというか、
この二人は友達にしたいので、
がんばって書きます。
次回もエレナ編です。

精霊の巫女の想い

エレナ＝ルクウィッドは、
悲しげに目をふせていた。
リエンカは黙ってそれを見つめている。
口数の少ないリエンカには、ステラ＝ワイズの
心中をうまく説明ができなかった。
嫌われているわけではないのに。
むしろ好かれている（本人は否定するだろうが）のに。
リエンカは、それども説明しようとした。
だがーー。
「エレナ、おひるごはんだよ！！」
ミルカ＝ライニオが入りこんできたので、できなかった。
ジゼット＝ブラックも後ろにいる。彼女は、いつものように
花を抱えていた。
「ミルカ、ジゼット、ありがとう」
エレナの作り笑いに、ミルカたちは気づかなかった。
ジゼットが百花白蓮（フルール・ブラン）と、真っ赤な十字架（フラム・クロワ）の
形をした花、火炎十字を差し出す。
エレナは受け取り、白い上等そうな花瓶に生けた。
「あ、リエンカもいたんだ！！　ステラはいないの？」
「いない……」
食事の用意は四人分あったので、リエンカもまた共にした。
お昼の食事は、やわらかく煮てソースをからめたお肉料理と、
ふわふわに焼きあげられたパン、あつあつの野菜スープだった。
お肉はパンにはさんで食べるらしい。
ちょっと手が汚れたけれど、白いパンとお肉はとても
良く合い、最高のお味だった。
エレナの笑顔が、一瞬だけ輝いたくらいのおいしさである。

食事の後も、ミルカはいろいろなことをしゃべっていた。
エレナに会わない間、何をしていただの、どんなものを食べたのかだの、何の変哲もない世間話だった。
エレナはいつもだったら笑顔で聞いていたが、食後のお茶を飲んでいる最中、あまり笑わなかった。
食後のお菓子はケーキだというのに、手もつけなかった。今日は、アーモンドやシナモンをしみ込ませたタルト生地に、赤すぐりやラズベリーのジャムをはさんだ、ミルカの最高傑作だったのに。
「どうしたの、エレナ？　ケーキおいしくない？」
「ごめんね……お腹いっぱいなの」
あいまいに笑ってエレナは問いを交わした。
ようやく彼女の様子がいつもと違うことに気付き、ミルカたちが首をかしげながら部屋を出ていく。
エレナは置いて行かれたケーキを、一口食べてみた。いつもならおいしいのだろうが、味がしない。砂の様な味とは、こういうことをいうのだろう。
食事はおいしかったのに。
エレナははあっ、とため息をついた。
「……私も部屋、帰る……」
「うん、また、来てね……」
ほとんどまるごとのケーキを抱え込み、リエンカはパッと姿を消した。
ガチャリと扉がいきなり開けられたのは、彼女が消えたのとほぼ同時だった。
「あなたは……！？」
そこにいたのは、黒衣の男だった。
エレナをさらった男だ！！
「精霊の巫女よ、ご機嫌はいかがかな？」
「最悪よ。早くここから出して！！」

じろりと睨んだにもかかわらず、
彼は楽しそうに笑っていた。
エレナを中に突き飛ばすように、
入って来る。エレナはさらに苛立ちをつのらせた。
「やはり似ている……」
そう呟いた囁きは、彼女には届かなかった。

黒衣の男は、自ら茶を入れ、おいしそうに飲んでいた。
エレナの嫌そうな顔など、どこ吹く風である。
エレナのきれいなエメラルドグリーンの瞳や金髪を、
愛しいように見ていた。だが、エレナをみている訳
ではないらしい。エレナを通して、誰かを見ていた。
黙っていると、髪を掴んで撫で始めたので、
エレナは眉をしかめて振り払った。
一瞬眉をつりあげたものの、男は何も言わなかった。
「この部屋は気にいっているか？」
「気に入るわけがないでしょう！！　ここは牢獄だわ！！
出ることができないんですもの！！」
カッとなったように、男が手を振り上げた。
エレナだって、気が強い方である。
間合いを取り、彼に攻撃を与えようと
眉を吊り上げて応戦した。
「違う……やはり、違う……」
「何ですって！？」
結局上げた手は下ろされた。ギロリと睨みつけてくる。
「来い！」
「ちょっと！　何するのよっ」
男は痛いくらいの力でエレナの白い腕を掴むなり、
そのまま歩き出した。喚こうがまったく手の力は緩まない。

途中でミルカやジゼットに会ったけれど、彼女たちは笑顔で手を振ってきた。訳が分からなく、エレナは苛立ちばかりがつのっていった。

と、そこで思い出した。ステラが言っていたのだ。

?適合?するかするまで、ここからは出れないと。

では、何か検査のようなものをするのだろう。

エレナは少し気が楽になり、男の手を振り払うと、そのまま後ろについて行った。

その後ろ姿を、空中に浮いた少女と、ステラが戸惑ったように見つめていた。

精霊の巫女の想い（後書き）

ついに彼女が？適合？するか
しないかがわかります。
気になりかもしれませんが、
次回の主役はルークです。
交互に主役が入れ替わって
やっていくので、次回も
よろしくお願いします。

精霊の巫女の妹の失敗

ルーク＝ウレイアは、食事の用意をしていた。
基本カストルと当番で料理をすることにしている。
もう一人の仲間、ビショップ＝ルクウィッドは、料理が下手なので当番には入っていない。
「ルークルーク！！」
と、カストルが目をきらきらさせて走り込んできた。鍋にぶつかりそうになったので、慌ててルークが彼女を抱きとめる。
「な、何やってんだよっ！！」
「ご、ごめん……。でも、チーズにそっくりな実を発見したんだよ。食べてみて」
それは茶色い殻につつまれた、小さな実だった。匂いだけなら、すごくおいしそうだ。
ルークは笑顔になると、殻をむいて実を口に放り込んだ。その時である。
「その実を食べちゃ駄目！！」
青ざめた顔でビショップが走り込んできた。口に入れた瞬間にそう言われ、ルークも青ざめる。
「それは毒だよっ！！　お腹壊すよっ！！」
それを聞くなり、ルークは実を吐きだした。口の中に残る異物感に、数秒せき込む。
「か、カストル！！　毒なんじゃねえかよっ！！」
「ええ、私食べたけど、なんともないよ？　いつものように食べてるのに」
いきなり怒鳴られ、カストルは頬をふくらませた。進めた物が毒と言われたことにも、腹を立てている。
「それは、君の進めたやつと、君が食べたやつが

別物だからだよ」
「そんなことないっ！！　おなじのを持って来たよ」
ビショップは首を振ると、ルークが捨てた実と、どこからか取り出した実を並べた。
あっ！！　とカストルが声を上げる。
その二種類の実は、殻の色は同じでも、中身の色が違っていた。ルークの方は、毒々しい赤、ビショップが持ってきた方は、きれいな金色だった。
「こっちが毒、こっちが食べれる方だよ」
カストルは今にも泣きそうな顔になっていた。
体が小刻みに震えている。
「カストル、落ちつけよ。もう怒ってないって！！」
「もういいっ！！」
カストルは目から涙を流すと、前に一直線に走り出した。前も何も見ずに走る。
ルークたちはギョッとなった。
下は崖だ！！　一番すばやいルークがかけつけ、落ちる前に彼女の腕を掴んだ。
「おい、大丈夫か？」
「だい、じょうぶ……」
落ちかけて青ざめた彼女は、震える声で言った。
ホッとしたルークはすぐに引き上げようとするが、運悪くそこにモンスターが現れた。
ひときわ奇妙な風体である。
上半身も足も人間だが、腰は蠍（さそり）のもので、毒のある尻尾もあった。
「ギルタブルルだ！！」
ビショップは慌てて弓を構えたが、長い尻尾が飛んできたので、よけるために下がらなくてはならなくなった。お湯を張った鍋が倒れ、

火が消える音が聞こえる。煙が上がって
見えなくなった内に、魔物はルークに
襲いかかっていた。
　片手を掴んでいる状況で、勝てる訳はない。
ルークとカストルは、崖下に突き落とされた。
「ルーク！！　カストル！！」
　ビショップの悲痛な声を聞きながら、
彼らは下へ下へと落ちて行ったーー。

　結論から言うと、彼らは一切怪我を
しなかった。精霊の姫からもらった
武器が輝き、彼らを守ったのだ。
　だが、上にのぼる手段は今のところ
ないので、二人は困り果てていた。
　なにしろ、食料も水もないのである。
　朝ごはんを作る途中でこんなことに
なったため、お腹がペコペコだった。
「腹、減ったなあ……」
「ごめん……あたしが変な実拾ってきたから
……ううん、あたしが前を良く見て
走ってたらこんなことにはならなかったよね」
　卑屈に言うカストルに、ルークは苛立ちを覚えた。
確かに、落ちたのはカストルのせいもある。
　けれど、実際に悪いのは魔物である。
　この状況じゃなくても、近くに崖があったのだから、
落とされていた可能性はあったはずだ。
　もう一度「ごめんね」と言われ、ルークは
眉をしかめて言い返した。
「何度も謝るなよ、余計に腹が立つ」

自分でも驚くほど、とげとげしい声が出た。
カストルは黙り、沈黙がその場を支配する。
ルークはさらに苛立ったが、何も言わずに
歩き続けた。その時、ようやく何かが見える。
それは、洞窟だった。外よりも快適に
思えたので、彼らはすぐに場所を移った。
雨風がしのげるので、洞窟の方が格段にいい。
その辺で拾ってきた薪（たきぎ）に術で
火をつけ、二人はそれを囲む。
「どこかに食料ないか、探すね」
「俺も行くよ。俺の方が、植物には詳しいから」
火をその場に残し、勇者と精霊の巫女の妹は、
奥へと歩いて行くのだったーー。

精霊の巫女の妹の失敗（後書き）

次はエレナのお話です。
あの男に連れて行かれたエレナの
続きを書きます。あの男の正体は、
まだ明かせませんが、次回も
見てください。

精霊の巫女の苦しみ

精霊の巫女、エレナ＝ルクウィッドは、
今現在変な器具に寝そべっていた。
手足はしっかりと拘束されている。
窮屈以外の何者でもなかった。
だが、検査が終われば、帰ることも
できるらしい。ルークにも会える！！
エレナは必死で我慢をしていた。
その間、男は装置をいじって何かしている。
「もうすぐだ……もうすぐ、会える……」
ぶつぶつとうわごとのように何か言っていた。
きみが悪いが、エレナは黙っているしかない。
口を開いたら、黙れと怒鳴られたからだ。
元々おしゃべりな方のエレナには辛いことだったが、
ルークやビショップの顔を思い浮かべ、なんとか
耐えるのだったーー。

彼女が無口に耐えている、その時。
一人の少女が部屋の前に立っていた。
その顔は、決意を秘めている。
少女は人間ではないらしかった。
足はあるのだが、空中をふわふわと漂っている。
その目は嫌になるくらい悲しい。
今にも泣き出しそうなのを、少女はこらえていた。
「止めなくては、あの人を……彼女を、助けなくては……」
ふらふらと少女は前に進む。だがーー。
「きゃあああああっ！！」
扉に張り巡らされた結界が、少女を拒んだ。

誰も入っていかないように、張ってあるものなので、
そこまで威力はなかったが、少女は空中で座っているかのような態勢を取っていた。悔しそうに扉を見やっている。
「何をやっているの？」
そこに通りががったのは、エレナが心配でその場をウロウロしていたステラ＝ワイズだった。
「助けて……」
「え？」
「どうか彼女を助けて！！　あの人を、止めて！！」
「あの人って、あの方のこと？」
扉を指でさしながら聞くと、少女は頷いた。
姿がだんだん薄れていく。ステラはギョッとなった。
「今日は……ここまで……みたい、ね……。
たのみましたよ……」
そのまま少女の姿は消えていった。
次の瞬間、部屋から狂ったような笑い声が響いてきた。
あの方こと、黒衣の男が部屋から出てくる。
エレナがその後ろから足をふらつかせながら出てきた。
「適合した！！　もうすぐだ！！」
「あの……エレナ……ちゃんは、どうなるのですか？」
男が振り向いた。氷の様な眼で睨まれ、ステラはたじろぐ。
「お前が知る必要はない」
ステラはムッとなったが、彼のことを大切に思っているので
黙っていた。倒れ掛かったエレナを受け止める。
エレナは目がうつろで、どこも見えていないようだった。
ステラは自分が検査をされた時のことを思い出し、
嫌な気持ちになる。機械に縛り付けられて黙っているのも
きつかったが、甘い飲料水みたいなものを飲まされたあと
がつらかった。最初はふわふわと空中に浮いているかのような、
とても気持ちいい感じなのだが、少し時間が経つと気持ちが悪くな

るのだ。
たとえるのならば、熱を出した時の状態に近いだろうか。
ステラはそのままエレナを抱き上げると、部屋に戻した。
彼女はどうなってしまうのだろう。
そう思うとつらかった。でも、自分にできることなどない。
ステラは黙って部屋を出ていくしかないのだった。

精霊の巫女の苦しみ（後書き）

ついに始まった検査に、エレナはひどく苦しみます。
適合してしまった彼女。初めてのことなので、
元精霊の巫女たちはどうなるのかがわかりません。
次回はルークたちの場面に戻ります。
ビショップは出ませんが、見てください。

巫女の妹は勇者に恋をする

ルーク＝ウレイアは、カストルとともに歩いていた。
洞窟内はかなり暗い。それでも、明かりがあるので
幾分マシな方だった。
「カストル、疲れてないか？」
ルークはすぐ後ろを歩いている少女を振り返った。
彼女はすぐさま首を振る。カストルは、ルークの行動の一つ一つに
頼りがいがあることを感じていた。
今はふたりだけである。カストルは他の異性にそんなことを感じた
ことはいまだかつてなかった。
と、くぅー、とかわいらしい音が聞こえた。
カストルの腹からである。彼女は顔を赤らめた。
「ちょっと休むか？　俺も腹減ったよ」
笑顔を向けられたが、カストルは恥ずかしさのあまり
顔も上げられなかった。ルークは彼女の気持ちが分かっているので、
特に何も言わずにポケットをたぐっている。
チーズケーキがひときれ出てきた。昨日、夜食として作った
残りだった。今すぐにでもかじりつきたい欲求をこらえ、
ルークはカストルの前につきだした。
「ほら、これでも食えよ。少しは足しになるだろ？」
カストルは途端に笑顔になった。苦笑しつつも、
ルークがさらに彼女に近づける。
「ありがとね、ルーク！！　いっただきまーす！！」
カストルはかすめとるようにそれを取ると、大きな口を
開けてケーキにかじりつこうとした。だが、その手が寸前で止まる。
潤んだ瞳が、ルークの姿を映した。
「ルークの分は？」
「ねえよ。一個しかねえんだ」

「じゃあルークが食べなよ」
「俺がお前に渡したんだろ！！　お前が食え！！」
しばらく、彼らの舌戦は続いた。お前が食え、
あんたが食えと何回もやり返す。
そして、口の中がかわき、さらに空腹をつのらせてから、
二人の戦いは終結した。まったく無駄な争いである。
「は、はらへったあああ……」
「おなかすいたよおおお……」
結局、二人はケーキを分け合って食べ、少しお腹を満たした。
少ししか食べられなかったが、罪悪感を感じるよりはその
方がよかったとも言えた。
二人は食べ物を求めて歩き出した。少し楽になったので、
どちらからともなく歌を歌い始める。
ルークも自分の歌が下手であることを忘れたかのように、
調子っぱずれな声で歌っていた。
彼らはいつになく上機嫌だった。だがーー。
四時間後、その機嫌は一気に下落するのだった……。
「なんっで、ひとっつも食べれそうなものが
ねえんだよおおおおおっ！！」
ルークの叫び声が洞窟内にこだました。

ルークとカストルは、はじめは笑顔で探していた。
毒キノコを見つけ、ちょっと眉をしかめながらも、
それでも探していた。けれど、洞窟内には食べれそうな
ものが全然なかった。ルークが昨日食べたチーズの匂い
のする毒の実や、毒キノコ、雑草しかない。
彼らはすっかり気落ちしていた。
無理もない事と言えた。だって、二人は少しの
食料しか口にしていないのだから。
お腹はすいたし、疲れたし、ルークたちは

明らかにうんざりとした様子だった。
「カストル、ちょっと外出るか？　魔物でも倒して肉かなんか手に入れようぜ」
「うん……」
カストルに異論はなく、彼らは洞窟から出て歩き出した。新鮮な空気が二人を包み込む。
少し機嫌をよくしてルークたちは歩き出した。
「手分けして探そうぜ。何かあったら、大声で呼べよな」
「わかってるー」
ルークとカストルは一旦分かれた。

ルークは腹を鳴らしながら歩いていた。
実はさっき食べた時、カストルに多く上げていたのである。
カストルより、食べた量が少なかったのだ。
「腹減ったな、出てこい、魔物！！　肉にしてやる！！」
ルークは銀色にきらめく剣を構え、大声を上げた。
と、それに呼応するように、魔物の声が聞こえてきた。
ズシンズシンと地面を震わせ、こちらに足音が近づいてくる。
ひっ！とルークは息をのんだ。
……でかい。明らかにでかい。肉にするどころか、こちらが肉にされる。
それはアンズーという怪物だった。顔がライオン、体がワシである。
ぎらり、と肉食獣特有の目がきらめいた。
ルークの額を、汗の玉が伝わって行った。手が震えているのが自分でもわかる。
「ギャアアアア！！」
「うわあああああっ！！」
鉤爪の攻撃を、ルークは間一髪でかわした。もう戦うどころではない。

食料にされないように逃げるしかなかった。
とーー。
「きゃあああああああっ！！」
「カストル！？」
今にも泣きそうな悲鳴が響いてきたので、ルークは慌てて彼女の声が
した方へ駆けだした。カストルは、へたり込んで動けなかった。
「あ……あああ……あああああああああ！！」
彼女の前にいるのは、ロック鳥だった。さっきのアンズーよりも巨大な姿だった。象をさらって食べる、とも言われているんのだ。
「カストル！！　逃げろ！！」
ルークは爪の攻撃を剣で跳ね返した。ロック鳥は、いきり立って彼に狙いを絞って攻撃してくる。ターゲットが、完全にカストルからルークに変更されていた。
「逃げろったら！！　殺されるぞ！！」
ルークの方も泣きそうになっていた。爪の攻撃は完全にかわすことは出来ず、肩に傷がいくつか刻まれ、血が垂れ落ちている。
それに、彼の後ろにはカストルもいるから、うかつに動けないのだ。
？……く。ルーク……聞こえますか……？
「なんでこんな時に！？」
ちょうど間の悪い時に、アンジェからの通信が合った。
カストルは役に立たない。ルークは頭の痛みにたえながら、剣を持つ手に力を込めるのだったーー。

巫女の妹は勇者に恋をする（後書き）

久しぶりに二千文字いきましたよ。
次回の次回は、ビショップの再登場です。
次回の主役はエレナになります。
次回もぜひ見てください。

精霊の巫女は友を得る

エレナ＝ルクウィッドは、自室のベッドで目覚めた。
枕元には、リエンカが立っていて、無言で見つめている。
思わず悲鳴を上げ、彼女は飛び起きた。
「きゃあああああっ！！」
「私、リエンカ……」
たとえ知っているものでも、目の前でじいっと無言でのぞきこんでいられたら、びっくりするものである。
エレナは涙目で彼女を睨んだ。
「知ってるわよっ。知ってるけど、無言で見つめられたらびっくりするにきまってるでしょっ」
リエンカは首をかしげていた。エレナの言っている意味が理解できないのだろう。彼女は毒気を抜かれ、ベッドから降りた。
まだ頭が痛い。あの男、何を飲ませたのか、と腹が立った。
「エレナ、大丈夫？」
心配そうにリエンカが聞く。表情は変わらないが、声に不安が混じった感じがした。エレナは無理に笑顔を作る。
「大丈夫よ」
「嘘、よくない……」
エレナは思い切り舌打ちをしたくなった。作り笑顔をのことも完全に見破られているらしい。
「まだ寝てた方、いい……」
そのままベッドに戻されそうになり、エレナは話を変えた。
「ねえ、そういえば、リエンカが私を運んでくれたの？
誰かが運んでくれたってことは覚えてるんだけど」
まるで頭に霞がかかっているかのように、思い出せない。
リエンカではないような気もしたが、聞いてみたかった。
「違う……ステラ……」

「えっ？」
それは予想外だったので、エレナは思わず目を丸くした。
彼女は、エレナを拒絶したのだ。仲良くなりたいと、
親友になりたいと思ったのに。
でも、彼女はエレナのことを嫌いなのだと思っていたが、
そうではないのだろうか。
それだけのことなのに、エレナは心が温まるのを感じた。
『エレナ、大丈夫！？』
ジゼット＝ブラックとミルカ＝ライニオがやってきた。
大声で叫ばれ、エレナは頭を抱えたくなる。
「大丈夫だから、ちょっと声を落として……」
エレナが眉をしかめて言うと、二人は慌てて声を小さくした。
気遣わしげな瞳が、さらにエレナを苛立たせる。
だが、彼女はそれ以上文句は言わなかった。
「またステラはいないのか？」
「いないみたいね」
「みんな、ステラのこと好き？」
エレナは思わず聞いていた。こっくりと全員が頷く。
「好きだよ、ボクはステラが好き」
「あたしも！！」
そのまま四人は食事を楽しんだ。今日の朝ごはんは、
しっとりと焼き上げた大きなアップルパイである。
かなり大きく、ゆうに四人分以上あった。
ミルカが切り分け、全員がそれを食べようとした、その時だった。
遠慮がちなノックの音が響いて来たのだ。
ジゼットが開けると、そこにいたのは、ステラ＝ワイズだった。
久しぶりに仲間のもとへやってきたというのに、嬉しそうな
色は皆無で、罪人のような暗い顔だった。
「私も一緒に食べていい？」
「もちろんだよっ！！　待ってて今切るからね！！」

きれいな三角形に切られたアップルパイが、ステラの皿にも載せられる。ひとまず、全員が口に運んだ。
あまずっぱいりんごが、やわらかい生地によくあっている。あっと言う間に四人は平らげ、おかわりしていたけれど、ステラだけはゆっくり食べていた。
彼女は食事中も他の人がしゃべりかけようと黙っていたが、食べ終えるころになってようやく口を開いた。
「私、もうやめるわ……」
唐突な言葉だった。ミルカもジゼットも目を丸くしている。
「もう、壁を作って素の自分を隠すのはやめる。先に壁を作っていたのは、あんたたちじゃなくて、あたしだったのよね」
「ステラどうした？」
「黙って話を聞いてジゼット！　話さなきゃいけないのよ！！」
きつい声で言われ、ジゼットは眉をしかめながら黙った。
ミルカも不満そうな顔で頬をふくらませている。
「私、いい子ぶってたわ。人のことばかり考えて、自分を殺してた。そんなんじゃ、本当の親友なんて出来る訳なかったわ」
ミルカたちが胸をつかれたような顔になった。
彼女たちも、ステラが無理をしていたのは気づいていたのだろう。
「エレナ、私、あんたが大嫌いよ。あんたが、素でいい子で、人を引き付ける力があって、誰にでもやさしくて、本当に妬ましかった！！　でも、私は同じくらいあんたが好きなのよ！自分でも自分がわからないわ！！」
エレナの目から涙があふれた。最初は悲しい意味での涙だったけれど、ステラの告白をすべて聞いた後では、それはうれし涙に変わった。
「ステラ！！　ステラ！！　ステラ！！」
「抱きつかないでよ、うっとうしい！」
ステラはムッとしたようにしがみつくエレナを睨んだが、決して突き放すことはしなかった。

「私たち、親友になろう、ねっ？」
「あんたバカじゃないの？　あたしはあんたを傷つけたのよ？
それでも友達になりたいっていうの？」
「うんっ！！」
ステラの目にも涙が浮かんだ。
「あんたバカよ！　大バカよっ！！　何考えてんのよ！！
……あんたたちも、私のこと聞いたらあたしが嫌いになるわよ」
ステラはエレナが止めるのも聞かず、すべてを告白した。
エレナに仲良くしておいて拒絶したことも、エレナの提案を却下したことも、すべて語った。ミルカたちは、それを聞いても彼女をうとましく思ったりはしなかった。
「ケンカならだれでもするよ。ステラは悪くない」
「私、ステラ好きだもん！！　嫌いになったりしないよ」
「リエンカ、ステラ、大好き……」
ステラはエレナに抱きつかれたまま、うなだれたように泣きじゃくっていたーー。

精霊の巫女は友を得る（後書き）

次回はルークたちの冒険の続きです。
最後あたりでビショップも久しぶりにでます。次回も見てください。
追伸ですが、もうすぐあの男の正体が明かされます。

勇者は巫女の妹の秘密を知る

ルーク＝ウレイアは、今ピンチだった。目の前には
巨大な鳥、ロック鳥。頭に響くのは、精霊の姫アンジェの声。
そして、へたりこんでいるカストルは、一歩も動けない。
「何で今なんだよ……」
?どうかしたのですか??
再びアンジェからの通信があった。鈍い痛みが頭を支配する。
ルークは唇をかんでそれに耐えた。
「アンジェ!!　今じゃないといけないか!?
今ピンチ!!　食われそう!!」
?きゃあああああっ?
ルークの目を通して光景を見たアンジェは悲鳴を上げた。
さらにルークは痛みを感じて後ずさる。ロック鳥の鉤爪が、
ルークの肩を傷つけ、血が滴り落ちた。
?ああああああああ!!?
「アンジェうるさい!!　ちょっと落ち着いてくれよ!!」
悲痛な声ががんがんと頭に響いてくる。もしかしたら、
アンジェは泣いているのかもしれない。そうも思ったが、
今は彼女のことを気にかけている暇はなかった。
?ごめんなさい、ルーク……出直します……?
そこで彼女の通信は一方的に切られた。
何なんだよとルークは苛立たしげに思う。
だが、ここでじっとしている訳にもいかなかった。
このままでは殺されるのも時間の問題である。
「うわあああああっ!!」
ルークはロック鳥の方に向かって行った。
力を込めて剣を振りおろす。羽毛に覆われた足に、
わずかな傷が刻まれた。攻撃はこれで終わりではない。

ルークは力を高めた。……生まれて初めて使えた力。
剣気を込めた一撃を放つつもりなのだ。
「食われて……たまるかよっ！！」
剣から光の塊が放たれる。それは、この前使った時よりも、確実に大きかった。良く見ると、精霊たちが力を増幅させている。彼らは最後に、心からの笑顔をルークに向けて消えていった。
（皆……ありがとう！！）
ロック鳥に攻撃が命中する。この世のものとも思えぬほど大きな絶叫が響き渡った。だが、やつは大けがをしてはいたものの、まだ生きていた。
……完全に怒っている。ばさばさと翼をはばたかせ、こちらに体当たりをくらわせてきた。
ルークはそれをよけて石を投げつけ、魔物の注意がそれた瞬間、カストルを抱き上げて駆けだした。
ロック鳥はルークを逃がすつもりはないらしく、向きを変えて襲いかかった。
ルークはカストルを抱きしめてうずくまった。
覚悟を決めて目を閉じる。だがーー。
いつまでたっても痛みはこない。ルークは振り向くと、目を大きく見開いた。そこには、大地の精霊、カプリコルヌがいたのである。開いた地面が、大きな鳥を飲み込んでいく。
ロック鳥は地面を鉤爪でひっかいたが、そんなことであらがえる訳はない。完全に姿は地面の下へと消えていった。
「カプリコルヌ……？」
「あんたにすべてをかけるぜ～。俺の力貸してやる～。自分を犠牲にしても女の子守る気持ちに魅かれたぜ～」
ちかっ、と茶色い石、？プリュネル？がルークの銀色の剣で輝いた。
……これで石は五つである。

「ありがとう、カプルコルヌ……」
「礼はいらねえぜ～」
ルークはにっこりと笑うと、カストルを抱き直した。
カストルはいつの間にか気絶していたらしかった。
ぴくりとも動かない。一言も発さなかったのは、それが原因だったのだろう。
「カストル、起きろよ……」
ルークが彼女を起こそうと声をかけた、その時だった。
「……ちゃん、えちゃん……おねえちゃん……」
すすり泣くような声が彼女の口からもれた。
それは驚くほどか弱くて、儚げな声だった。
「どうして死んじゃったの？　どうして私を置いて行ったの……」
責める声は、どこか力がなく、無意識に目から涙があふれていた。
それに反比例するように、ルークにしがみつく手はかなり強い。
ルークは何も言えずに立ち尽くした。カストルはいつも明るく見えた。
ちょっと悲しい顔になることもあったが、普段はとても明るくてうるさいくらいだった。だが、それは演技だったのだろうか。
「村は助からなかったのに……あいつの、精霊王のせいで……」
最後の言葉に、ルークはぎょっとなった。カストルの村が破壊されたのは、精霊王のせい？　カストルと精霊王に何の関係があるのだろうか。ルークは訳が分からなくなった。
それに、精霊の姫と、精霊王はどういう関係なのだろう。
ひょっとして、兄妹！？　もしくは家族！？
そう想定してしまい、ルークは血の気が引いた。
カストルと会った時、アンジェが暗い顔だったのは、そのせいだったのだろうか。今日、アンジェは何も言おうとしていたのだろうか。大事な話ではなかったのか？
アンジェを怒鳴りつけた自分を、ルークは責めたくなった。
とーー。

「ルーク！！」
駆け寄ってきたのは、ビショップだった。
服は何故かボロボロで、怪我さえもしていた。
「おい、どうしたんだよ、お前！！」
「飛び降りたんだよ。怪我もするでしょ？」
「バカ！！　お前弓は！？」
ルークはいつもの調子で怒鳴りつけ、ビショップの目に涙を浮かばせた。ビショップは首をふり、うなだれたように口を開く。
「弓は壊されちゃった……。だから、必死でルークたちを追って落ちたんだよ。あのままじゃ、殺されてたもん」
「そっか……ごめん、何も知らないのに文句言って」
カストルの目がうっすらと開いたのは、その時だった。
「ルーク！？　きゃあっ！！　何してるのよ！！」
どんっとつきとばされ、助けてやったのにとルークは呻いた。カストルの顔がどんどん紅くなっていく。
「お前が気絶してたから、助けてやったんだろ！！
あのままじゃ死んでたぜ！！」
「なにもお姫様抱っこすることはないでしょっ！！」
「あの状況で何も考えられなかったんだよっ！！」
ぎゃあぎゃあと言い合う二人を、ビショップはどこかムッとしたように見ていたーー。

勇者は巫女の妹の秘密を知る（後書き）

次回、あの男の正体が明かされます。
次もルークたちが主人公です。

勇者たちは精霊の姫の告白を聞く

精霊の姫アンジェが、せっぱつまったような
真剣な顔で、ルークたちの野宿の場所に訪ねてきたのは、
翌日のことだった。かなり無理をしたらしく、彼女の
顔は青ざめている。
倒れかけたので、慌ててルークが駆け寄って抱きとめた。
「すみません、ルーク……」
アンジェは小さな声で謝った。ビショップとカストル
は心配そうに眉をひそめている。
「いつもの通信でもよかったのに」
「いいえ、やっぱり、私が直接来て話さなければならない
ことだと思います……。聞いてください」
アンジェをその場に座らせ、ルークもまた座った。
彼女はしばらく黙っていたけれど、やがて口を開いた。
「今回お話したいのは、精霊の巫女をさらった
あの男についてです……」
三人は身を乗り出して話に聞き入った。
アンジェは心を落ち着かせると、
決意を秘めた目で言い放った。
「あの男は、精霊王であり、私の兄です」
「えええええっ！！」
叫び声をあげたのは、ルークだけだった。
「なあ、冗談だよなあ、あいつがアンジェの
兄だなんて！！」
ルークは動揺のあまりかわいた笑い声
を上げたが、アンジェはしっかりと首を振った。
ビショップがやっぱりね、と声をこぼす。
「どういうことだよ、ビショップ！？

お前知ってたのか！？」
「兄だってことは知らなかったけど、
だいたいは近しい人かなとは思ったよ。
二人の態度を見てたらなんとなく、ね」
ルークは黙り込んでいるカストルに
目をやった。瞬時に、その目が大きく
見開かれる。彼女は震えていた。
拳を痛いくらいに握りしめて、
震えていた。目には大粒の涙。
「人殺し……」
「カストル？」
「人殺し！！」
カストルの口から飛び出したのは非難の声だった。
アンジェは悲しげな顔をしながら黙っている。
彼女はカストルの反応を予想していたらしい。
「兄妹ですって！？　じゃあ、何で止めなかったのよ！！
何人も死んだわ！！　村の人達が何人も！！」
「カストル、よせよっ！！」
ルークが彼女をはがいじめにしようとしたが、
すぐに振り払われてしまった。カストルは
アンジェの頬をひっぱたく。
アンジェはよろめき、その場に倒れ込んだ。
「カストル！！」
「いいのです、ルーク……。私は殴られて
当然のことをしたのです。私は、
兄を止めることができなかった……」
「わ、私、絶対にあなたたち兄妹を
許さないんだからっ！！」
カストルは目から涙をこぼすと、
ルークが止めるのを無視して

走り去ってしまった。
その後を、ビショップが追いかけていく。
「アンジェ……。何で言ってくれなかったんだ？」
アンジェは一瞬体を硬くしたけれど、ルークの顔が責めているのではないと分かり、ためらいがちに言い返した。
「私は臆病な愚か者です。責められたくなかった……。責められて当然なのに、責められたくなかった」
こらえきれなかったらしく、アンジェは目から涙をこぼして泣いてしまった。
ルークたちは、アンジェにとって初めての仲間であり、友達だった。初めて自分を精霊の姫としてではなく、ただの「アンジェ」として仲良くしてくれた人たち。
「馬鹿。責めるわけないだろ？　ビショップは責めた？
カストルだって、本気で言ってるわけじゃない。つい混乱して言っちゃっただけだよ」
ルークは珍しく怒っていた。痛くない程度にアンジェの額を小突く。
その顔は、もう不安な顔をしていた子供のものではなく、どこかりりしさを秘めていた。
「ルーク……」
アンジェはルークに抱きつき、子供のように泣きじゃくったーー。

「待って！！　待ってよ、カストル！！」
「ついてこないで！！」
カストルは後を追ってくるビショップに金切り声をあげた。今は一人になりたかった。
姉の、死んでいった村人の敵。

それがアンジェの兄だった。
　信じられなくて、信じたくなくて、
頭が混乱していた。思わず思っても見ない
セリフが飛び出してしまったくらいだ。
　「人殺し」だなんてひどいことを言った。
「だって、放っておけないんだよ」
「放っておいて！！　余計なお世話なのよ！！」
　誰かが追ってきてくれて、嬉しいという
気持ちもあったが、素直になれなかった。
　それが、ルークであったとしても、
きっとカストルは追い払おうとしただろう。
「逃げちゃ駄目だよ。最後まで、アンジェのお兄さんは
話を聞こうよ。確かに、アンジェのお兄さんは
村の人達を殺したかもしれない。だけど、
何か理由がーーーー」
「うるさいっ！！」
　カストルは籠手をした手を振りまわした。
拳はビショップの頬をかすめ、彼を転ばせた。
「うるさいうるさいうるさいっ。村の人達が
悪かったって言うの？　お姉ちゃんが何か
悪かったって言うの？」
「違う！！　そんなこと言ってない！！」
「同じことよ！！」
　ビショップの目にどこか不穏な色が走った。
眉はつりあがり、拳に力がこもっていた。
「分からず屋！！」
「きゃっ！！」
　いきなり頬を叩かれ、カストルは悲鳴を上げて
倒れ込んだ。痛みよりも、驚きの方が勝っている。
　ビショップがそんなことをするとは全く

思わなかった。
「自分だけが正義だと思わないで。僕だって、ルークや自分が正義だと思ってた。
だけど、精霊王だって自分が正義だと思ってるんじゃないの？
彼には何も事情がないっていうの？」
ビショップの言葉は正論だった。カストルは黙り、自分のことばかり考えていた自分が恥ずかしくなった。精霊王のことなんて、ちっとも考えたことがなかったのだ。
「ビショップ……。そうだよね、あたし、アンジェたちのところに戻る」
「うん……一緒に行こう」
差し出された温かい手を、カストルは掴んで立ち上がった。

一方、アンジェはすでに泣きやんでいた。目は赤くはれ上がり、痛々しいほどである。髪もぐちゃぐちゃでところどころ濡れていた。
「なあ、アンジェ？　精霊王は、何でエレナを攫ったんだ？　アンジェは知ってるんだろ」
「あの男は、カストルのお姉さんの……」
アンジェが言いかけた、その時だった。雷鳴が轟(とどろ)く。いきなり雷の刃に貫かれ、彼女はその場に倒れ込んだ。
背後には、精霊王その人が立っている。
「にい……さん……」
「余計なことを話されては困るな」
「お前っ、アンジェになんてことをするんだ！！
たったひとりの妹なんだろ！？」
「お前には関係のないことだ」

そこに、ビショップとカストルが帰ってきた。
ぎり、とかみしめた歯が音を立てる。
「精霊……王……！！」
「お姉ちゃんの敵っ！！」
ビショップが口元をおさえて後ずさる。
カストルは隠しておいたナイフを構えると、
精霊王に向かって行った。
「カストル、やめろーーーーっ！！」
ルークの制止だけが、むなしく
その場に響いたーー。

勇者たちは精霊の姫の告白を聞く（後書き）

ついにあの男の正体が明かされた。
カストルの姉と彼の関係は！？
次回はエレナ編になりますが、
次回もよろしくお願いします。

精霊の巫女は仲間たちと話し合う

あの男の検査に？適合？してしまった
エレナ＝ルクウィッド。
仲間たちは今相談の真っ最中だった。
「ねえ、どうするの？」
そう言ったのは、ステラ＝ワイズだった。
かなり真剣な顔である。ミルカ＝ライニオも、
ジゼット＝ブラックも、そしてリエンカも
同じような顔で悩みこんでいた。
もちろんエレナも同様である。
何せ、自分の事なのだ。
「ルークが助けに来てくれたら……」
「ルーク？」
一番最初に反応したのはリエンカだった。
まばたきをしながらエレナを見てくる。
失言に気付いてエレナは口元を押さえたが、
あまりに遅すぎた。いつの間にか、
ジゼットとミルカが目をきらきらさせていた。
「ルークって誰？　エレナの好きな人？　恋人？」
「何何？　私にも教えてよお！！」
エレナは真っ赤になってうつむいた。
だが、二人の少女は追及の手を緩ませず、
ずいずいと詰め寄りながら聞いてくる。
エレナが涙目になった時、ようやく
ステラが助け船を出してくれた。
「こら、今はそんな話をしている場合じゃないでしょ。
考えなきゃいけないことは山ほどあるのよ」
不満そうな顔をしながらも、二人は「はーい」と

言い返して話に戻った。
「エレナ、気にしなくてもいいから」
「ありがとう、ステラ……」
エレナは途端に笑顔になった。ステラとこうして笑えることがとても嬉しかった。
ルークに会えない時も、彼女たちと笑いあえることが唯一の救いだった。
彼女たちがいなかったら、きっとくじけてしまっただろう。エレナはもう一人ではないのだ。
ルークは、今誰かと共にいるのだろうか……。彼が心配だった。責任を取らされてないか、とか、魔物に倒されてないか、とかそんなことばかり考えてしまう。会いたいと、心から思う。
彼は今、どこにいるんだろう。
「私、戦う……」
リエンカが唐突に言った。
全員は驚いたように彼女を見やる。
リエンカは無表情だったが、拳を握ってやるき満々といった様子だった。
「あの人、エレナ、渡さない……リエンカ、エレナ、守る……」
「リエンカ……」
エレナは感動したように目に涙を浮かべた。
ミルカやステラ、ジゼットも同じように拳を握った。
「あたしもやる！！　……確かにあの人はあたしを助けてくれた。だけど、友達に何かしようとしてるのなら許せないよ」
「私も……エレナを守りたいと思うわ。
彼は何か隠している……」
「僕だってエレナも守る！！」

全員は一致団結した。エレナ以外の者たちが、
彼に助けられた。だが、何か隠している様子の
彼に友達が何かされそうになっているのも確かだ。
守りたい、彼女を。たとえ、命の恩人に逆らっても。
その後、全員はとりあえずミルカの作った料理を平らげた。
今日のメニューは、ミルクを使って煮込んだライスである。
ミルカ曰く、「ミルクガユ」というらしい。
お腹に優しく、しかもおいしい料理を、エレナたちは
鍋一杯平らげたというーー。

一方、ここは城の一室。かなり豪華な造りの部屋に、
宙に浮いた少女がいた。その顔は、悲しみに沈んでいる。
「お願い、誰か、あの人を止めて……！！
あの人は、恐ろしい事に手を染めているの！！
どうか、誰か、止めて……！！」
少女は男を止めることができない。
彼女は、すでに死んでいるのだ。
体がないため、状態が安定せず、一日でも少ししか
姿を他人に見せることができない。
男とは何度も話したが、彼は彼女の意思を受け入れない。
話など聞いてくれないのだ。
少女は涙交じりなためいきをもらし、彼女はまた消えていく
自身の姿を見つめながら、その場からいなくなった。

エレナは一人になると、ルークのことを思いながら
ベッドに倒れ込んだ。写真を取り出し、ながめる。
かなり幼い頃に取られたものだった。
ルークと、何も考えずに一緒にいた頃の写真。
エレナがルークを愛する前の。
その写真にはエレナも写っていて、

髪に百花百連（フルール・ブラン）の髪飾りを飾って
笑顔な彼女がいた。当然その顔は今よりも幼く、
彼と離れることなど考えもしないように、
彼の手をしっかりと握っていた。
　彼も抵抗せず、彼女の手を握り返している。
エレナはそっ、と自分の髪に手を伸ばした。
　さらさらとした感触だけがその手にはある。
どこかでなくしてしまったのか、髪飾りは
エレナの手元にはなかった。
「本当に、どこで落としたのかしら。
ルークは覚えてないかもしれないけど、
私には本当に宝物だったのよ……」
　誰に否定されようと、エレナはルークが好きだった。
捨てろと言われても、ずっと反抗して髪飾りを
手元に置いていた。十五歳になった今でも。
　おもちゃの髪飾りでも、エレナには宝物なのだ。
彼が何の気もなしにくれたものだとしても。
エレナにはかけがえのない貴重品だった。
「会いたいよ、ルーク……。早く来て、私を助けてよ。
お願いよ、ルーク……」
　彼女の小さな嗚咽（おえつ）の声が外を吹く風にまぎれる。
その声を聞いたのは、悲しげな顔で彼女を見つめる
少女だけだったーー。

精霊の巫女は仲間たちと話し合う（後書き）

精霊の巫女たちは彼に反旗を翻す。
それに感動するエレナ。
ルークとの想いと仲間の存在が
今の彼女を支えていた……。
　次回はルークたちの冒険に戻ります。
次のお話もよろしくお願いします。

巫女の妹は真実を知る

「よせ、カストル！！」
ルーク＝ウレイアの声は、カストルを止めることはできなかった。彼女はただ悲しみのままに突き進む。
目から雫をこぼしながら、感情をそのまま目の前にいる男にぶつける。男は明らかに驚いた顔をしていた。
カストルに反撃しようとさえしていない。
ルークとビショップ＝ルクウィッドは動くことができなかった。
「何で、あいつ動かないんだ？」
「どうしたんだろう……」
カストルの構えたナイフが男の肌を傷つけた。
そのまま彼は後退し、血の匂いがあたりに散らばる。
「カトレイア……」
「えっ？」
男が小さく呟いた言葉に、カストルの動きが止まった。
震える手からナイフが落ちる。
慌ててビショップがそれを拾い上げ、血を拭って懐に隠した。ルークの眉がしかめられる。
「カトレイア？」
「どう……して、あんたがお姉ちゃんの名前を！？あんた、お姉ちゃんの何なの！？」
カストルは悲鳴のような声を上げた。
籠手をした手で必死に男の腕を掴む。
男は何も答えず、愛しげな視線で彼女を見ていた。
「カトレイア……」
カストルの顔はひどく青ざめ、動くことができない。姉と彼の間に何かが合ったのは確からしかった。
もどかしい。事実が知りたい。

自分が知っていることに何か違いがあるのなら、
それを教えてほしい。
だが、目の前にいる男は一切そんなことを
してくれそうになかった。
「あっ！！」
苛立ったせいか、手が意思とは関係なしに
動き、男の腕に拳を叩きつけていた。
男の顔が驚愕に見開かれる。
「カトレイア、まだ怒っているのかい？
あの時のことを」
「わ、私は、カトレイア……じゃ、ないっ！！」
「また会おう。今度は迎えに来る」
訳が分からない彼らを置いて、精霊王は
その場から消えてしまった。
よろよろと立ちあがったアンジェが説明をする。
「兄は、変わりました。今は彼女が死んだことも、
理解したくはないのでしょう」
「どういうことなの、アンジェ！？
お姉ちゃんと彼の間に何があったの！？」
すがりつくカストルに、アンジェは悲しげな
顔で真実を告げた。
「あなたのお姉さまと、私の兄は恋人同士でした」
『恋人！？』
全員の声がかぶった。アンジェは黙って頷き、
続きを口にする。
「彼女は精霊王だと知らずに兄と恋に落ち、
兄は敬遠されるのが嫌で彼女にそのことを
打ち明けることはありませんでした」
そのことを思い出すたびに、アンジェの胸はひどく傷む。
だが、言わない訳にはいかない。彼らには聞く権利がある。

「だけれど、言っておけば彼女が死ぬことはなかったかもしれません。彼女は村を救うために死のうとしたのだから」
「精霊王は、儀式のことを知らなかったの？」
カストルが眉をひそめながら聞いた。
恐れ多くも精霊王である。多くの村人たちが指示もなしにそんな非道な行為をするのだろうか。
「はい。村人たちは何の指示もなしに儀式を行いました」
カストルの顔から血の気が引いた。多くの者が、自らの村のために娘たちを犠牲にした。
だが、精霊王はそのことを知らない。
村人の村のためにという願いは届かなかったのだ。
「お姉ちゃんのやったことは、無駄だったの？」
カストルは体から力が抜け、その場にしゃがみこんでしまった。
ビショップが手を差し出したが、振り払って泣き出してしまう。
「お姉ちゃん……お姉ちゃん！！　お姉ちゃん！！」
彼女の姉は村のためにと命を捨てた。
でも、それを教えたのは村人だろう。
彼女の行った行為は無駄だったのだ。
「兄は、村人を呪いました。そして、自分自身も呪った。その日から兄は変わったのです」
アンジェはただ淡々と語っていたけれど、その目は明らかに潤んでいた。
その後は聞かなくても分かった。大事な人を失った彼は、カストルの村を滅ぼし、多くの人の命を奪った。
「ルーク、兄が何故エレナを攫ったのか聞きたかったんですよね？」
唐突に話を振られ、ルークはためらった後、首を縦に振った。
ビショップも真剣な顔でアンジェを見る。
彼女が語ったのは、衝撃の事実だった。
「兄は、カストルのお姉さま、カトレイアを復活させようとしています。

彼女の魂をエレナの体に宿そうとしているんです」
アンジェの声に震えが混じる。ルークとカストルの顔がしだいに青ざめていった。
「そうしたら、お姉ちゃんはどうなるの？」
ビショップが震える声で聞いた。
「同じ体に二つの魂は入れません。エレナは死んでしまうでしょう」
「そ、そんな！！」
黙っていたカストルがやっと口を開いた。
「お姉ちゃんは、生き返ることを望んでいるの？」
潤んだ目がアンジェを見つめる。違うと言ってほしいと心から思っているのは明らかだ。アンジェが首を振ると、ほっとしたように立ちあがった。
「カトレイアはそんなことを望んでいません。だけど、兄は彼女の静かに眠らせてと言う希望をはねのけました。兄はどうしても彼女を失ったことを認めたくなかったんです」
ルークは最初の頃に彼が精霊の巫女たちを集めていること、それは彼女たちを助けるためではなく、自分のためにやっている、とアンジェが言ったことの意味をやっと知った。
でも、エレナを死なせる訳にはいかない。
精霊王から、エレナを絶対に助けて見せる。
ルークは決意固め、拳を強く握り締めたーー。

巫女の妹は真実を知る（後書き）

ついに精霊王の目的が明かされます。
事実を知り、ショックを受けるカストル。
そして、エレナを助けるという決意をかためる
ルーク。次回も主人公たちはルークたちで続きます。

決意する勇者たち

ルーク＝ウレイアは、ビショップ＝ルクウィッド、カストルとは離れた位置にある巨石に腰かけていた。
いろいろなことを知って頭がパンクしそうだった。カストルもビショップもショックが大きいらしく、口を利かずに座り込んでいる。
アンジェもまた黙り込んで離れたところにいた。とても帰るような気分ではなかったのだろう。
と、キッとルークが顔を上げた。
決意に満ちた目がその場を見渡す。
「俺、エレナを助けたい。お前らはどうなんだ？
びくっ、とビショップたちは身をすくませた。
迷うように目が泳ぐ。
「嫌なら帰ればいいよ。俺だけはエレナを助ける」
「ルーク……。決意したのですね」
アンジェが感動したようにルークを見つめる。
その目をしっかり見つめて彼は頷いた。
「何言ってるの、僕も行くよ！！
エレナお姉ちゃんは、僕の姉なんだよ！？」
「あたしも行く！！　エレナも、お姉ちゃんも……精霊王だって救いたい……」
二人の目にも迷いが消えた。
危険な目にあうかもしれない。
だが、それでも大事な人を助けたいと思う気持ちの方が強かった。
「なあ、アンジェ。お願いがあるんだ」
「ええ。何でもおっしゃってください」
アンジェが真剣な顔で尋ねた。

ルークもまた真剣な顔で語る。
「精霊を貸してほしい。俺たちも、
ビショップもカストルも、まだ認められて
いない精霊がいる」
「構いませんが、どうするのですか？」
「戦う」
　アンジェが息をのんだ。
精霊と戦う。それは、並大抵の気持ちではできない
ものだった。命の危険だってある。
「精霊と戦う……？」
「俺達には時間がないんだ。エレナがいつ犠牲に
なるか分からない。だから、気まぐれな精霊が
認めるのなんて待っていられない」
「お願い、アンジェ！！」
「僕からもお願いするよ！！　精霊を貸して！！」
　アンジェはかなりの間黙っていた。
やがて、静かに口を開く。
「分かりました。精霊を貸しましょう。
ですが、どんな目にあおうとも私は責任を取れません」
「そんなの自己責任だ。アンジェを責めたりしないぜ！！」
　ルークたちの決意が揺るがないのを見て、アンジェは手を
高く上げて精霊を召喚した。
　まだルークを認めていない、バランス、ヴィエルジュ、
リオン、カンセール、トロー、ポワソン、スコルピオンが現れた。
　その中には、ビショップたちを認めた精霊たちもいる。
「けけけ、アンジェ様？　おいらたちに何か用か？」
　その場を代表してリオンが口を利いた。
ルークを見るや、全員が睨むように見る。
「あなたたちには、ここにいる三人と戦ってもらいます」
『はあ！？』

精霊たちは驚いたように三人を見た。冗談でしょう、と言わんばかりにアンジェを見つめる。
アンジェが首を振ると、小馬鹿にしたようにルークをけなし始めた。
「こんな小僧に何ができるって言うんですか、アンジェ様。身の程を知らぬ小僧に道理を教えてやらねばな」
バランスの目がぎらりと輝く。と、いきなり現れたカプルコルヌが土の塊を彼にぶつけ始めた。
「おい貴様〜、あんまりルークを馬鹿にするんじゃねえぜ〜」
「生意気な！！」
バランスが攻撃を全てよけ、力の塊を投げつけようとする。アンジェはキッとなると、二人の精霊の攻撃を止めた。
「やめなさい、二人とも。あなた方は両方悪いですよ。特に、バランス。精霊の勇者はかなりのものが認めています。それを馬鹿にするのは、わたくしも、そのものたちも侮辱したのと同じですよ」
バランスは悔しげな顔をしたが、ルークに謝る気はもっとうないらしく顔をそむけてしまった。
ジェモー姉妹、ベリエ、サジテール、ヴェルソーも姿を現し、睨むようにバランスを見つめていた。
トローたちも彼らを睨み、ばちばちと火花のようなものが散る。大人しいベリエでさえ火花を散らしていた。
「さあ、誰と戦いますか、ルーク？」
ルークは吟味するように精霊たちを見つめていた。その様子が初期とは違うことを驚きながらも、精霊たちはルークをまだ認める気がないらしい。
「リオンと戦う」
闇の精霊はおかしそうに笑うと、ルークの方に近づいてきた。ビショップたちの鋭い視線にもひるまず、口を開く。

「おい、精霊の勇者だからっていばるなよ」
「いばっているのは、そっちだろ」
あくまでルークは冷静だった。カッとなり、
リオンが攻撃を放とうとする。
アンジェの叱責が飛んだ。
「リオン、まだ勝負を始めるとも言わないのに、
攻撃をしてはいけません。それは卑怯ですよ」
チッとリオンが舌打ちして力をおさめた。
ルークの挑発するような声音に腹が立っていた。
最初はあんなに不安そうな顔をしていた小僧が！！
リオンはそう思っていたが、アンジェには逆らえないので
黙っていた。顔が怒りでひどく紅い。
「アンジェ様、早く開始を告げてくれ！！
この小僧をボコボコにのしてやる！！」
「それはこっちのセリフだ、リオン！！」
ルークもいきなりの攻撃に腹が立ったらしく、
鋭くリオンを睨みつけていた。
「僕たちだって負けないよ、ね、カストル？」
「もちろんよ、こんな奴に負けるもんか！！」
全員のやる気を確認した後、アンジェは
静かに試合開始の合図を告げたーー。

決意する勇者たち（後書き）

ルークたちが精霊と戦います。
三人対一体。有利なようで、
有利ではないのが精霊の強さです。
次回もよろしくお願いします。
しばらく主人公はルークに移ります。

闇の精霊との戦い　前編

「覚悟しろ！！」
最初に動いたのはリオンだった。
ルークはあやういところで攻撃をさけ、
闇の塊が岩にぶつかって消える。
「それはこっちのセリフよ！！」
カストルがルークの右側から蹴りを
叩きこもうとした。偶然左側から
飛び出してきたビショップと激突する。
「何してるのよ、馬鹿っ！！」
「いったあああい！！　カストルこそ！！」
「遊んでる場合じゃないぞ！！
ちゃんとやれよっ！！」
ルークはため息をつきながら攻撃を繰り出した。
涙目になってお互いを睨みつけるも、ビショップたちも
攻撃を開始する。
アンジェや、彼らを認めた精霊たちが見守っていた。
「あたるもんか！！」
「うわっ！！」
闇のかたまりが直撃し、ルークは思わずふっとんだ。
受け身を取れずに叩きつけられ、呻いてその場にうずくまる。
「よくもルークを！！」
「覚悟しなさいよね！！」
カストルたちが怒りで攻撃力が上がり、なんとか攻撃が
命中するも、ルークと同じように叩きつけられてしまった。
「負け……ねえぞっ！！」
「ぐっ！！」
はあはあと苦しそうな息使いが聞こえる。

しかし、ルークは勝ち誇ったような顔をする
リオンの胸に剣を突き立てていた。
　人間だったら致命傷だっただろう。
だが、精霊はそのくらいでは死なない。
　それでも多少のダメージは与えたようだった。
「なかなかやるようだな、人間」
「そっちもな！！」
「「隙ありっ！！」」
　ルークが膝をついたのを見計らってリオンが
悔しそうに言う。その隙を狙い、
ビショップとカストルが連携攻撃を仕掛けた。
　カストルが蹴り技を見舞った後に、
ビショップが魔術で追撃する。
　が、それは彼にとってあまり打撃には
ならなかった。それでも多少の痛みは
感じたらしく、ぎろりと二人を睨みつける。
「人間の小僧と小娘ふぜいが……
なめるなあああああああああっ！！」
「「うわあああああああああっ！！」」
「きゃあああああああああああっ！！」
　リオンが力を解放して三人を吹き飛ばした。
岩に激突し、うめき声を上げる彼らに、
精霊たちが不安そうな顔になる。
（三人とも、私は信じています。
だから、がんばって……！！）
　彼らの勝利を確信しているのはアンジェだけだった。
認めたものたちでさえ、精霊に勝つのは無理なのではないかと
思っている。それでも、その状況がルークたちを
有利に動かせた。
「私も～ルークを認める～。

精霊相手に～ここまでやるのはすごいわ～」
　海の精霊ポワソンがルークを認めたのである。
そのままルークの剣に入って行ってしまい、
ちかっ、とさらに青い石が剣に追加された。
「私もルークたちを助ける！！」
　ヴェルソー、ベリエ、カプリコルヌ、全ての
ルークたちを認めた者たちが剣に、弓に、籠手に
吸い込まれるように消えていった。
　精霊の力を得て力を増したルークたち。
勝負はこれからである。
「覚悟しとけよ、リオン！！
　俺たちは絶対にお前を倒す！！」
　キッと睨みつけてそう言うルークに、
リオンはさらなる怒りをつのらせて
襲い掛かったーー。

闇の精霊との戦い　前編（後書き）

更新が遅れてすみません。
なかなか思いつかずに
進まず、こうなってしまいました。
次回も主人公がルークたちで
後編を書いていきます。
必殺技のようなものも出す予定です。

闇の精霊との戦い　後編

ルークはキッと闇の精霊・リオンを
睨みつけて剣を構えていた。
突っ込んできたのに足払いをかけ、
少し時間稼ぎに成功する。
リオンはさらに激怒し、無差別に
攻撃を振らせてきたので三人は
慌ててよけなければならなかった。
息を切らせながら彼らは攻撃をよけきる。
アンジェはもはや一言もなく
彼らを見守っていた。
三人の耳に、精霊たちの声が届く。
否、心に直接響いたと言った方が正確だろうか。
?ルーク、ビショップ、カストル。
私たちの声が聞こえますか??
それはジェモー（姉）の声だった。
リオンには聞こえていないようなので、
三人は無言で頷く。
さらに声は響いてきた。
?あたしたちの声の通りに動けよな?
力貸してやるよ?
今度はジェモー（妹）の声である。
ルークたちはこれにも頷き、剣、弓、籠手
にそれぞれ明るい光が宿るのを確認した。
リオンが気づいたのかチッと舌打ちする。
ルークたちは驚きのあまりそれには気づいていなかった。
「すごい……」
「ありがとな、皆……!!」

「これで、あいつに勝てる……！！」
？続けますわ。集中して。心の中の声に身をゆだねなさい？
今度の声はヴェルソーだった。
三人は目を閉じ、何も考えずに武器を握りしめる。
「させねえよっ！！」
リオンがそのスキに攻撃を仕掛けようとしてきた。
だがーー。
？それは～、こっちのセリフだぜ～！！？
「ちくしょう！！」
土の塊が落ちてきてリオンの攻撃を妨害した。
カプリコルヌの力だ。
リオンは顔を真っ赤にして怒り、さらに
攻撃をしようとしたけれど、今度は蔦が絡んできて
動けなくなった。
？邪魔、させない……！！？
「ベリエエエエエエッ！！
離しやがれ、てめえええええっ」
ベリエの自然の力がリオンを縛る。
リオンの怒声が上がり、一瞬びくっ、と
なったけれど、ベリエは力を緩めたりしなかった。
ルークたちを認めたもの全てが彼らに協力している。
アンジェはルークたちの成長に心から拍手を送っていた。
最初は弱い敵にも苦戦していたルークが、今は
精霊に認めさせ、協力までさせているのだ。
？ルークたち、お前に勝つ！！　だから、
絶対、離したり、しない……！！？
リオンはいつもは気が弱いベリエに
反抗され、驚いたように目を見開いていた。
同時に、ルークたちが目を開く。
「リオン、覚悟しろよな！！　こっから

俺達の反撃だ！！」
「覚悟してください！！」
「勝つのはあたしたちだよっ！！」
　先に動いたのは、ビショップだ。
きらめく弓をしっかりと掴み、弓を引き絞って
リオンに向けて放った。
「ヴェルソー、力を借りるよ！！」
？了解ですわ、ビショップ？
　ビショップの背にヴェソーが寄り添った。
矢に青い光が灯り、リオンめがけて突っ込んでいく。
「水柱乱舞（オンズ・ラック）！！」
「ぐあああああああっ！！」
　十一の水柱が上がり、リオンを空中に打ち上げた。
リオンが地面に落ち着る前に、今度はきらめく籠手
をしっかりと握ったカストルが空中攻撃を仕掛ける。
「ジェモー、来て！！」
？分かった！！？
？協力してやるぜ！！？
　双子のジェモーがカストルの顔をかすめるように姿を現す。
籠手が風の色を映してひときわ強くきらめいた。
「鎌鼬（ミストラル）！！」
「うあああああああっ！！」
　風の刃がリオンを切り裂く。
受け身を取れずに叩きつけられた彼に、
ルークの剣が迫っていた。
「これで最後だ！！　来い、ベリエ！！」
？がんばる！！？
「葉乱舞（フィユ・エール）！！」
「あああああああああああっ！！」
　絶叫が響き渡る。

葉が羽根のように舞い、浄化の光がその場に溢れた。
リオンは再び叩きつけられ、もう動くことなどできない。
「やった、勝ったわ！！」
カストルの上機嫌な声がその場に響き渡ったーー。
「俺は絶対に認めねえぞ！！　何かの間違いだ、俺が負けるなんて！！」
リオンは負けてからも喚き続けていた。
その顔はひどく青ざめており、かなりの衝撃を受けたことがうかがえる。
と、バランスがルークたちの方に歩み寄り、さらにリオンに強い衝撃を与えた。
「バランス、てめえ、裏切るのか！？」
「こやつは十分に強い。わしの力を貸したとて、何の申し分もないよ」
ポワソン、カンセール、スコルピオン、ヴィエルジュも動いた。
トローは迷うようにリオンと彼らを交互に見ている。
「リオン、往生際が悪いですよ！！
あなたは負けたのです」
アンジェが厳しい声でたしなめた。リオンは睨むようにルークたちを見つめていた。トローが迷った末、動き始めている。誰も味方はいないことに気付き、リオンは諦めたように姿を消し、？プリュネル？に光がともった。
これで全部がそろった。剣、弓、籠手に十二の宝石がともってきらきらと光っている。
「ルーク、ビショップ、カストル、かんばりましたね」
アンジェに笑いかけられ、ルークたちは頷くと、そろぞれの武器をかかげて笑みを浮かべたーー。

闇の精霊との戦い　後編（後書き）

ルークたちがついに全ての精霊に認められました。
次回は彼らの修行に入ります。
その次が久しぶりにエレナ編に行きます。
次回もよろしくお願いします。

精霊の姫は覚悟を決める

ルーク＝ウレイアは急ごしらえで作られた
テントの中で料理を作っていた。
いい匂いがその中にたちこめている。
精霊たちに認められたことが嬉しくて、
かなり上機嫌だった。
ビショップ＝ルクウィッドと、カストルが
こっそりつまみぐいをしようとして怒鳴られ、
それをくすくすとアンジェが笑っていた。
アンジェは少し具合がよくなったらしく、
人一倍食べては三人をあきれさせていた。
呆れつつも、おかしそうに笑うのだが。
精霊たちは人間界のものは口にできないらしく、
ふわふわと浮きながらただ見ているだけだった。
何故アンジェは人間界のものを口にできるのかと
いうと、？姫？と？王？だけは特別な存在だからだ。
他のものは人間界のものを口にすれば汚れ
てしまうが、彼らは汚れることなくそのままの存在でいるのだ。
他の精霊たちは一応はルークたちを認めている様子
だが、闇の精霊リオンだけは拗ねたような顔だった。
仕方なく認めたということを隠そうともしない。
でも、三人はそれ以上口を出さずにいた。
アンジェがとがめようとした言葉もさえぎる。
三人には分かっていた。これ以上何か言えば、
彼の機嫌をさらにそこねると。
しばらくは彼のためにも、放っておいた方がいいのだった。
「おーい、できたぜ！！」
『やったあ！！』

「待っていましたわ」
ついにルークの料理が完成し、嬉しそうな声を
上げた二人と、アンジェがすぐにやってきた。
今日の料理は、分厚いハムステーキに、
付け合わせのポテトサラダ、具だくさんのコンソメスープ、
チーズいりのパンがそれぞれ二つずつ。
デザートにはバナナのタルトレットだった。
どの料理もおいしかったので、四人は瞬く間に
それを平らげ、皿はすぐに空になった。
アンジュでは割ってしまうので、
カストルとビショップが皿を洗うことになる。
ルークが皿を拭いていると、隣に立った
アンジェが急に真剣な顔になっていた。
「エレナを、精霊の巫女を助けるためには、
魔法を使いこなせないといけません」
「そうだよな。よし、アンジェ、
稽古付けてくれよ！！」
「私も！！　私もやる！！」
「僕も！！　早くお姉ちゃんを助けたいもん！！」
四人は片付けが終わると、精霊たちを伴って
テントを横に動かすと、そこで稽古をすることになった。
笑みを消したアンジェが三人の前に立ち、
攻撃をしてくるようにと命じる。
「ルーク、カストル、ビショップ。
三人でかかって来なさい。
精霊の力も使い、全力で」
「えっ！？　アンジェに本気で来いってこと！？」
「む、無茶だよ、アンジェ！！」
「そうよ、危険すぎるわ！！」
「いいから来なさいッ！！」

アンジェの言葉は有無を言わせない
響きだった。あまりに強い勢いに、
三人は顔を見合せている。
「どうなっても、知らないからなッ！！
来い、バランス！！」
「了解じゃ」
ルークはためらいながらもバランスの力を
剣に宿し、アンジェに飛びかかった。
ビショップとカストルが小さい悲鳴を上げ、
顔を手で覆って目を閉じる。
だが、三人が思ったような結果にはならなかった。
アンジェが手をかがけた瞬間、ルークはバランスとともに
吹き飛ばされ、その場に叩きつけられたのだ。
「うぅっ、な、何で……！？」
二人は異変に気づいて目を開け、そして形成が逆転
しているのを見てぎょっとなった。
ルークは打ち付けた腰をさすりながら、
涙目でアンジェを見上げていた。
アンジェは真剣な顔を崩さず、静かな声で言い放つ。
「本気で来なかったでしょう？」
「ほ、本気でなんていけるわけないだろ！！」
「そんなことで、兄に、精霊王に勝てるのですか！！」
そう怒鳴られて、ルークはアンジェのことを思い出した。
彼女は精霊王の妹、精霊の姫。
「精霊の力だけでは、私には勝てません。
私に勝てないのならば、精霊王にだって勝てないでしょう」
「で、でもアンジェ……」
「安心してください、ビショップ。精霊の力では
私を殺すことなどできません」
それは殺すための力ではないから。

アンジェはそんなことを望んでなどいなかった。
できることならば、話し合いたい。
彼らにそんなことなど強制しない。
もし、殺すのならば、彼の血縁である私が殺す。
止められないのならば、私に責任があるのだから。
「あなたたちは彼を止めるだけでいいのです。
もし、それができなかったら、私が、妹
である私が殺します」
ビショップは顔が青ざめるのをどうすることも
できなかった。アンジュの殺す、と言った顔には
嘘も偽りもない。彼女は本気だった。
肉親を殺すことなど、ビショップは考えたこともなかったのだった。
たとえ、犯罪や間違いを犯しても、殺すなどできなかった。
「アンジェ、殺すのは最終手段だよね？」
ビショップは確認のためにそう言った。
アンジェだって、話し合いを望んでいるはずなのは分かっている。
たった一人の肉親なのだから、悲しくないわけがない。
「ええ、できれば、話し合いだけで終わらせたいと思います。
でも、それはできないだろうということも分かります」
「そんなこと！！」
カストルが叫び声をあげた。
アンジェはさらに言葉を続ける。
「ルーク、あなたは、エレナのために命の危険を冒そうと
しています。ビショップも、カストルも、
大事な人がいたらそうするでしょう。
彼も、そうなのです。カトレイアが生き返るのならば、
命を捨てる覚悟で挑んでいます」
三人は何を言っていいのか分からなかった。
アンジェは最後にこれだけを言うと、稽古を再開した。

「だから、簡単にあきらめるはずはないのです。
あなたたちが、エレナをあきらめないように。
……さあ、来なさい！！　今度は三人で！！」
ルークたちはキッと顔を上げると、
それぞれの武器を構えながら飛びかかったーー。

精霊の姫は覚悟を決める（後書き）

ついにアンジェの覚悟が決まります。
ルークたちもさらに覚悟を決めて
アンジェと戦います。
彼らはどうなるのか！！
次回は久しぶりにエレナ編に行きます。

精霊の巫女は男のことを知る

エレナ＝ルクウィッドは、彼が何も
仕掛けてこないことに首をかしげながら、
仲間たちと共に楽しく過ごしていた。
今日もミルカ作の料理がテーブルに
並んでいて、皆がそれを平らげている。
「うわあ、今日もおいしそう！！」
「当たり前でしょ！！」
「こらこら、二人とも、ケンカをしない」
エレナが笑顔でそう言い、ミルカ＝ライニオが
頬を膨らませ、楽しげにステラ＝ワイズがたしなめた。
ジゼット＝ブラックとリエンカは無言で
皿やコップを用意している。
かなり楽しげな雰囲気だった。
今日のメニューは、とろけるほどにおいしいお肉
を使ったビーフシチューに、ふわふわに焼き上げたパン、
デザートにチーズスフレだった。
エレナの表情が一瞬だけ陰った。
チーズは彼女の幼馴染で想い人、ルーク＝ウレイアの
大好物なのだった。
エレナはよく彼に差し入れをしていたものだ。
「どうしたの、エレナ？　嫌いなもの、あった！？」
ミルカの目が潤んだため、エレナは慌てて何でもない
という顔をすると、先陣を切って食べ始めた。
仲間たちはそれ以上言わなかったので、彼女はホッとしていた。
ビーフシチューも、パンも、そしてチーズスフレも、
悲しげな気持ちを吹き飛ばすほどのおいしさで、
エレナはいつの間にか心から笑っていた。

ステラも、ジゼットも、ミルカも、リエンカでさえも
少し口元を緩ませていた。食後のアップルティーをたっぷり
と飲み、すっかり満腹になった彼女たちは伸びをした。
「うーん、お腹いっぱい……」
「お昼、何にしようかしら」
「もうお昼ごはんのメニューを考えているの！？」
「楽しみだな♪」
「まだ、食べるの……？」
彼女が飛び込んできたのは、わいわいと楽しげに話していた
時の最中（さなか）のことだった。
否、飛び込んできた、というのは表現として間違っているだろう。
だが、皆はそれほど驚いたためにそういう勘違いをしていたのだっ
た。
少女は壁をすり抜けてエレナの部屋に入ってきたのである。
「あ、あなたは……！！」
ステラが目を見開いた。彼女のことを思い出したのだ。
エレナがあの男に何かの検査に連れて行かれた際に、この少女が
彼を止めるようにと言って消えて行ったのだった。
「今、話を聞いていただいてもいいですか？」
「ひゃああっ、お化けっ！！」
「いやあああっ！！」
「幽霊さん？」
ジゼットとミルカが悲鳴を上げてエレナとステラに
それぞれ抱きついた。少女の顔が悲しげに曇り、
エレナが彼女たちをたしなめる。
「私は、幽霊ではありません。ですが、似たようなもの、
なのかもしれませんね。私は、入れ物のない魂です」
「み、認めたあああああっ！！」
「いい加減にしなさいっ！！」
なおも騒ぎ立てるジゼットに、ステラの雷が落ちた。

げんこつも落とされたため、涙目になって黙る。
「あの人を、止めてください。
彼は、とんでもないことをたくらんでいます」
「その前に聞きたいんだけど、彼は誰で、あなたは
何者なの？　教えてくれる？」
ステラが聞くと、少女は悲しげな顔をすると口を開いた。
「私の名前はカトレイア。生きていた頃は、精霊の巫女でした」
『精霊の巫女！？』
全員の声がかぶった。精霊の巫女、それはこの場にいる全員に
あてはまることだった。元と現在の差はあれど。
「私の罪は、彼と、精霊王と恋に落ちたことでした。
その時は知らなかったのです。彼は、自分の素性を何一つ
話してはくれませんでしたから」
彼女の話は、彼女たちを黙らせるには十分だった。
カトレイアはそれ以上は泣きだしてしまって
語ることができず、自分の村に伝わったという
書物を置いて去って行った。

それは、かなり昔の話。カトレイアが生きていて、
カストルがまだ幼い頃の話。
村の娘、カトレイアは、誰からも愛される優しい娘だった。
彼女に言いよる男は何人もいたが、カトレイア自身は
まだ恋や愛のことなど分かっていなかった。
恋に恋するお年頃というやつだったのかもしれない。
彼女は幾度となく誘いや告白、はたまた求婚を断ってきた。
そんな矢先、出会ったのが彼だった。
黒い髪を腰まで垂らして優しげな顔をした彼に、カトレイアは恋を
したのだった。
少女向けの小説を読んだときに感じたときめきが彼女の胸に浮かぶ。

彼が精霊王だなんてこと、考えたこともなかった。
　彼が人間ではないことは知っていたが、そんなことはどうだってよかったのだ。
彼も、カトレイアを愛し、二人は恋人の様な関係になった。
「ねえ、あなたの名前は何というの？」
「……俺には、名前は無いんだ」
「名前がないの？　じゃあ私がつけるね！！
　あなたは、クラウン。クラウンってどうかしら？」
　それでいいと言ったので、カトレイアは彼をクラウンと呼ぶことにした。
彼の雰囲気は高貴さを感じたので、王冠を現すクラウンという名前にしたのだった。
　彼は名前を呼ばれるたびに笑顔を見せるようになっていた。
ただ、村を出ていってから急に消えてしまうことに疑問を感じない訳では
なかったけれど、カトレイアはわざわざ聞いたりしなかった。
　彼が人間でなくてもいい。彼女は、彼をそのまま愛していたのだった。
でも、そんな幸せは長くは続かなかった。
　村に日照りが起こり始めたのだ。畑はかわいて食物を生み出せなくなり、
村に蓄えられていたものさえもなくなりかけてきた。
　彼らはちゃんと働いていたのに、とカトレイアは思わずにはいられなかった。さぼっていたものなど一人もいなかった。
　なのに、どうして精霊王はそんなことをしたのだろう、と。
そんなある日、村の長がこんなことを言い出した。
「精霊の巫女を、生贄を出せなければならぬ。
若い娘たちの中で選ぶのじゃ」
　若い娘はカトレイアも含めてたくさんいた。
どの顔も、衝撃で青ざめていたのをカトレイアは死んだ

今でも時々思い出す。
泣きだすものさえも出てきた。
生贄、人柱、名前を変えても、その事実は変わることはない。
村人のために、選ばれた娘は死ぬのだ。
「私が、精霊の巫女になります」
だから、カトレイアは名乗り出た。自分は、今まで幸せに
何不自由なく生きてきた、だから、今度は村人が何不自由なく
生きられるように、彼らを、そして愛する妹たちを守る。
私が、命をかけて守る。
そう言いだした彼女を、村人たちは全員が止めた。
母も父も祖父も祖母も村長も。生贄候補の者たちまでもが止めた。
唯一止めなかったのは、まだ幼くその言葉の意味さえも知らない
カストルだった。呑気に笑っていてしかられては涙をうかべている。
入れ替わり立ち替わり彼らはカトレイアを止めようとした。
だが、彼女の意思は変わらなかった。
村人たちはしまいにはあきらめたのだった。
その日の前日、彼女はクラウンに別れを告げた。
「クラウン、悪いんだけど、私と別れてくれないかしら。
あなたとはもう付き合えないの」
「カトレイア……？」
「もう、私の前に姿を現さないで！！」
腕を掴もうとする彼に、カトレイアは金切り声をあげて
踵を返した。悲しみに染まった顔を気づかないふりを
して走る。彼が、自分ではなくもっと他の女の子と
付き合うことを望んでいた。
私なんかよりも、もっと他の人を、と。
しかし、カトレイアは気づいていなかった。
彼がそこまでカトレイアに執着していたことを。
彼は帰ったふりをして村の中にいた。
術で姿を消し、彼女を見張っていた。

彼女はきれいな衣装をつけて舞っていた。
　自分ではない男と舞う様子を、彼は
衝撃を受けながらも黙ってい見ていた。
　彼女がお酒を飲み、そのまま棺に入れられるのも。
そこで、彼は初めて動いた。
　棺を開けると、彼女を助けようとしたのだ。
カトレイアは反発した。
「どうして私の邪魔をするの！？
　私の前に姿を現すなと言ったはずよ！！」
「これは精霊王が望んだことではない！！
　彼は、そんなこと望んではいない！！」
「何故あなたに分かるの！？
　そんな不謹慎なこと言わないで！！」
　カトレイアは彼を突き飛ばすと、自ら
つけられた火柱に飛び込んで命を絶った。
　自分が精霊王だということを言わなかった
彼の絶望は、想像に余りある。
　彼は声を殺して彼女の亡骸を抱きしめた。
死んだと言うのに、彼女は笑顔を浮かべて安らかな顔を
していた。しかし、精霊王、クラウンは成仏しかけていた
彼女の魂を現世にとどめたのだった。
「カトレイアを、殺したこの村に制裁を」
「やめて！！　私は自分から死のうとしたの！！
　村を傷つけないで！！　やめえええええっ！！」
　彼女の願いはかなえられなかった。
村は、跡形もなく焼き捨てられた。
人も、家も、泣き叫ぶ彼女をよそに燃え尽きた。
　残されたのは、幼いカストルだけ。
クラウンはカトレイアの魂を連れていくと、
その場から姿を消したのだったーー。

「なんて、ひどい話」
読み終えたエレナはそんな感想を口にした。
緑の目が涙で潤んでいる。
他の者たちは、口もきけないようだった。
精霊王とその恋人の過去を知ったエレナは、
なんとも言えないような顔でたちつくすのだったーー。

精霊の巫女は男のことを知る（後書き）

ついにエレナが彼の正体と
過去を知ります。
　茫然と立ち尽くす精霊の巫女たち。
次回もまたエレナ編で話は続きます。

精霊の巫女は覚悟を決める

エレナ＝ルクウィッドたちは、ショックを隠しきれない
様子で立ち尽くしていた。
手に持っているのは、カトレイアの血のつながりのない妹、
精霊の姫だという彼女が書いたと言う書物だった。
今まで、彼のことなんて知ろうとさえしなかった。
彼に、そんなに悲しい過去があったなんて。
皆黙っていた。
騒がしいミルカでさえも口を開かない。
そんな中、口を開いたのはステラ＝ワイズだった。
「とりあえず、食事を取ってしまいましょう。
このままじゃ悪くなってしまうだけだわ」
食事が再会された。だが、誰も食べたくて食べている
のではないのは明らかだった。まるで砂を食している
かのような顔を全員がしている。
ミルカ＝ライニオは珍しく文句を言うことがなかった。
黙々と全員は機械的に食事をしている。
その後は、誰も部屋に帰らずに何もしゃべらずに
彼女の部屋ですごしていた。
カチカチと時計の針の音だけが響く。
ミルカはいつの間にか部屋の本棚に並べてあった
お菓子の本を開いて読みふけっていた。
料理好きな彼女にとって、それは心を落ち着かせる
ために必要なものだったのだろう。
ステラは彼女と一緒にその本に見入っていて、
フォンダンショコラの写真を見つけると
それが食べてみたいなどと言っていた。
少しだけミルカの表情が和らぐ。

ステラが本心からそんなことを言ったのではないと、
ミルカはきっと分かっていたのだろう。
エレナ達もそれぞれその本を覗き込んだ。
「僕はこれが食べてみたいぞ！！　焼きりんご！！
すっごくおいしそうだ！！」
ジゼットがきらきらと目をきらめかせて
お菓子の写真を指でつつきはじめた。
それは、よくシナモンを利かせた
焼きリンゴの写真だった。
エレナ、リエンカもそれぞれ食べたい
ものや作りたいものを見つけて少し
笑顔を取り戻したようだった。
「私は、チーズタルトね。
とってもおいしそうだわ」
エレナの白い頬に赤味がさしていた。
脳裏に浮かぶのは、無論思い人である
ルーク＝ウレイアの姿だろう。
「リエンカ、これ、食べたい……。
いちじくのコンポート……」
リエンカが選んだのは果物を甘く煮た
コンポートだった。表情は変わらないものの、
口元が若干緩んでいるのが分かり、
ステラがくすくすと笑いだして
全員が笑顔を見せた。
リエンカは何で笑われているのかとかわいらしく
小首をかしげ、それがさらに全員の笑いを誘った。
しかし、楽しい時間はすぐに終わりを告げられた。
リエンカの姿がフッとその場から消えた。
ほぼ同時に、荒々しく扉をあける音が響く。
リエンカがいなくなるのは、あの男、精霊王が

やってくる時だけだった。
　リエンカは彼が苦手なのだ。全員の顔から
血の気と笑顔が消えた。
「エレナ＝ルクウィッドは、ここにいるか」
　エレナを見つめる彼の目には狂気と
喜びが混じり合っていた。ジゼットが
エレナを隠すように前に出る。
　ステラ、ミルカも同じように前に出た。
「エレナは、あなたには渡しません」
「あっちへ行けよ！！　エレナは、
絶対に連れて行かせないんだからな！！」
　ミルカとジゼットから魔力の高まりを感じた。
彼女たちは、精霊の巫女だ。
　魔術を操る力、多かれ少なかれ持っていた。
ステラがエレナの手を握る。
　その手が震えていたので、エレナは彼女の
手を優しく握り返した。
　パチパチと雷が彼女たちの手の中で
大きくなっていく。
　しかしー。
精霊王が手を上げると、それは彼女たちの手の中で
しだいに弱まってついにはしぼんだ。
　ぎょっとなり、二人が一歩下がる。
精霊王は逆に二人との距離を詰めた。
「な、何で……？」
「身の程を知らぬ小娘が、私に勝てるとでも？」
　ジゼットもミルカも自分の力が彼に劣っている
ことをよく分かっていた。それでも、彼が
誰かの力を打ち消すことまでは予想外だったのだ。
　精霊王の白い手がミルカの首にかかる。

ひやりと冷たい手に、なめらかな肌にたじろく
暇さえなかった。ミルカの悲鳴のような声が、
彼女の喉に絡んでかき消される。
　それに気づいたジゼットが精霊王に体当たりを
したが、見えない力に突き飛ばされて壁に叩きつけられた。
　彼はエレナを見つめながら笑って見せる。
お前が来なければ、この小娘を、殺すと。
　温かい心をなくした精霊王は相手が
力ない娘だとしても容赦などしなかった。
「やめて！！」
　エレナが悲鳴のような声をあげてステラの手をほどく。
精霊王の手が、止まった。
　ミルカは急に空気が入ってきたため、けほけほとせき込んで
その場にへたり込んでしまった。
　よろよろと立ちあがったジゼットが彼女に近寄る。
精霊王はエレナを見つめながら立ち尽くしていた。
「彼女たちに手を出さないで！！
　私はどうなってもいいから！！」
　エレナの怒りを秘めてきらめく瞳に、
悲しげに潤んだ瞳に、彼はカトレイアの姿を見た。
「いいだろう、来い」
　エレナは黙ったまま彼の手を取った。
ミルカ達が立ち上がり、彼女を止めようとする。
　しかし、精霊王が手を掲げると彼女たちは
動けなくなった。エレナが彼を睨みつける。
「彼女たちに手を出すなと言ったはずよ」
「傷はつけていない、約束はたがえてなどいないぞ」
　エレナは自分が死ぬことがなんとなくわかっていた。
彼は、自分の恋人を取り戻すためにエレナを犠牲に
しようとしている、と。

「さよなら、ルーク……」
小声でつぶやいた声は、誰かに届いたのだろうかーー。

精霊の巫女は覚悟を決める（後書き）

エレナが彼に連れて行かれます。
自分の死を悟るエレナ、彼女は
本当に生贄になってしまうのか！！
　次回はルーク編に戻ります。
次回もよろしくお願いします。

勇者は精霊の巫女の危機を知る

ルーク＝ウレイアは、彼女が苦しげな
顔をしたのを見てホッとしたように膝をついた。
はあはあ、と同じように膝をついた
アンジェが安心したような笑みを作る。
「よく、ここまで頑張りましたね、ルーク」
ルークは額の汗をぬぐって笑顔になった。
「ありがとな、アンジェ」
一時休憩をしていたカストルと、ビショップ＝ルクウィッドの
目も優しげなものになっていた。
ルークの顔に笑顔が広がった。
「よし！！　今日はあるもの使ってごちそうを作るぜ！！」
「やったあ！！」
「ルークが強くなったお祝いだね！！」
ルークは浮き浮きとしながら荷物を探っていた。
干し肉と調味料がいくつかと野菜とチーズと小麦粉だ。
「水を汲みに行こうよ、カストル」
「えっ？　うん、いいけど……」
ビショップがカストルを誘った。
カストルは一瞬精霊に出してもらえばいいのに、
と思ったけれど文句は言わなかった。
一時的にルークはアンジュと二人きりになる。
アンジュは料理ができないため、ルークにまかせて
見学をすることにした。
ルークは手際よく火をおこし、干し肉と野菜を
先に切ることにした。半分はスープ、半分は
炒め物を作るつもりで分けておく。
久しぶりに好物を作れるとあってルークは

目をきらきらさせていた。
「楽しそうですね、ルーク」
「うん！！　料理好きだし、チーズ入りのパンができるなんて久しぶりだしさ！！
　まあ、蒸しパンはできないけど」
「いつもありがとうございます。
ごめんなさい、私も料理ができればいいのですけれど」
「気にすんなよ、人にはできることとできないことがあるんだからさ」
「そうですね」
　二人が楽しげに話会っているその頃ーー。
ビショップとカストルもまた二人っきりだった。
　ビショップは彼女の隣を歩きながら顔を赤らめているがカストルはまったく気が付いていない。
「あの……カストル？」
「何よ」
「カストルってさ、ルークのこと好きなの？」
「なっ！？　何言ってるのよそんなわけないでしょ／／／」
　真っ赤になった顔を見れば「そんなことある」のだろうが、カストルはそんなことないと頭を振り続けた。
　ビショップは悲しげな顔をしながら続ける。
「ルークを好きになっても望みないよ。
だって、ルークはエレナお姉ちゃんが好きなんだもの」
「だ、だから違うって言ってるでしょう！！」
「僕にしておきなよ」
　真剣な顔で見つめてくるビショップに慌てるカストル。
だが、彼はずっと彼女を見つめ続けていた。

　その頃、ルークは。

野菜を切っている途中、ずきりと何故か頭が痛んだ。
手元が狂い、指を切ってしまう。
アンジェの悲鳴が上がったが、ルークは大丈夫だからといさめて指を口にふくんだ。
どうしたんだろうと思った時だった。
（ルーク……さようなら……）
「エレナ！？」
ここにはいない彼女の声が聞こえた。
攫われてから一度も会っていない少女。
ずっと一緒にいた幼馴染。
無能者と言われ続けた自分を、女性で唯一認めていた人。
悲しげな声を聞いた時、ルークは自分の気持ちを
初めて知った。彼女のことが、幼馴染としてではなく、
友達としてでもなく、一人の女性として好き、だと。
「エレナ……」
「どうしたのですか、ルーク？」
「よく、分からない……でも、エレナが危ないんだ！！
声が聞こえた、『ルーク、さようなら』って」
「大変です！！」
料理なんて作っている暇ではなかった。
ルークは血相をかえて材料を放りだし、
ビショップ達のもとにいそいだ。
その頃、ビショップは今まさにカストルに
愛の告白をしようとしていたところだった。
「あのね、僕は君が好ーー」
「ビショップ！！　カストル！！」
「ううわあああああっ！！」
「きゃあああああっ！！」
見つめ合っていてルークの登場に
気がつかなかった二人はぎょっとなった。

悲鳴を上げたので耳をふさいだルークが
ため息をつく。
「もうルーク空気を読んでよ！！」
（かえって助かったわ、ルークありがとう）
ビショップは頬を膨らませたが
カストルはホッとしたような顔になっていた。
ルークは彼を構うことなく言葉を発する。
「エレナが危険な目に遭っているかもしれないんだ！！」
「えええっ、お、お姉ちゃんが！！
で、でででも場所とか分かってるの！？」
「それが分かってりゃすぐに乗り込んでるよ！！」
「私が、知っています」
言い合う二人を、涼しげな声が止めた。
アンジェだ。彼女は冷たい空気をその身にまとっていた。
説得に応じなければ自身が兄を殺す。
そう言ったのは、アンジェ本人だ。
決意に満ちた瞳がきらりときらめく。
「あなたたちの以前の力ならば敵わないと思い、
ずっと言わずに来ました。ですが、今のルーク
ならもう大丈夫です。精霊王のいるところに転送します」
そう言ったのと同時に、四人を虹色の光が包み込んだ。
力がまだ万全でないアンジェのために、十三体の
精霊たちがくるくると光に飛び込んで力を増幅させる。
光が消えると、彼らの姿はすでに
精霊王の根城にあったーー。

勇者は精霊の巫女の危機を知る（後書き）

やっと書き終わりました。
見てくださっている方遅れてすみません。
もう少しでスピリッツは完結しますが、
もう少しお付き合いください。

精霊の巫女は城の屋上で

エレナ＝ルクウィッドは黙って
精霊王についていっていた。
彼もエレナもまた口を利かない。
静寂の中、響くのはかつんかつんと
いう靴の音だけだ。
エレナは黙ってついていくしかなかった。
正直怖い。だけれど、ルークが来てくれるという
安心感も半分はあった。
（ルーク、助けて……！！）
エレナは心中で助けを求めながら歩いていた。
彼が止まらないようにと必死に祈った。
仲間を犠牲にはしたくなかった。
だけど、犠牲になるのは怖かった。
それを彼には知られたくないため、
エレナは感情を消した無表情で歩いていた。
ずっと着かなければいいのに。
そう思ったエレナをあざ笑うように、
すぐに目的地についてしまった。
そこにはカトレイアがいて、
何事か叫んでいた。
今にも泣きそうな目は、決して喜んではいない。
彼女の声はエレナや精霊王には聞こえないみたいだった。
「ねえ、何か言ってるわよ」
「お前には関係ない事だ。口を利くな」
エレナはムッとなって口を開きかけたが、精霊王が
「仲間たちをひどい目に遭わせていいのか」と睨んだので
それ以上口を利くことができなくて口をつぐんだ。

歪んだ笑みを浮かべる彼とは対照的に、
カトレイアは嘆き彼に必死に訴えていた。
エレナには彼女の気持ちが分かる気がした。
一度死んでいるのにこれ以上他人の命を
使ってまで生きたくない。
声はきこえないけれど、エレナはそんな感じの事を
精霊王に彼女は訴えているような気がした。
カトレイアはエレナと目が合うと、彼に伝えてと
身ぶり手ぶりで話しかけてきたけれど、黙れと
命じられたエレナはただ首を振ることしかできなかった。
カトレイアは、それでもあきらめたくないのか
身ぶり手ぶりで何度もエレナに話しかけてきた。
エレナは彼女の必死な想いに応えたいと思うものの、
ステラ達のためにもそれを彼に言う訳にはいかない。
それに、言ったとしても死にたくないから言い逃れを
したのだろうと彼は判断しただろう。
彼はエレナの言葉に耳を貸さないのだから。
「カトレイア、もうすぐだ。もうすぐ君を……」
狂ったようにぶつぶつと言いながら笑う彼に、
カトレイアは静かに真珠のような涙を流した。
エレナは彼女をうかがいながら彼についていく。
やがて、そこには円陣のようなものが描かれていた。
円陣からは温かい光が発されていて、何故か
エレナは自分の身が危ういというのに
それに見とれてしまった。
あまりにもそれは綺麗だったのだ。
しかし、エレナはそれを長くは見ていられなかった。
精霊王はエレナにその円陣に入ることを指示し、
膝をつかせて目を閉じさせたのだ。
呪文のようなものがエレナの耳に聞こえてくる。

エレナは暗闇に一人残されたような錯覚に陥り、
ついそこには存在しない髪飾りをいじるまねをしてしまった。
小さい頃から何かあるごとに髪飾りをいじっていたので、
ついその癖が出てしまったようだ。
?どうして分かってくれないの!?　私の声を聞いて!!
クラウン!!　お願いよ!!?
ついにエレナにもカトレイアの声が聞こえた。
それは二人の気持ちが通じ合ったからではない。
エレナの中に、カトレイアが、彼女の魂が入り込もうとしているからだ。
エレナの魂を追い出し、カトレイアが彼女の体に存在するように精霊王が仕組んでいるからだ。
エレナはふわふわとする感じを必死に振り切ろうとしたけれど、体から離れ始めている魂をそのまま体に閉じ込めておくことはできなかった。
?私は、生きていたくないのに!!?
(ルーク……最後に、会いたかった……)
エレナが意識を保っていられたのはそこまでだった。
カトレイアの魂が完全にエレナの体に同化し、エレナの魂がはじきとばされてしまったからだ。
「カトレイア……ようやく君を……!!」
「エレナ!!」
ルークが飛び込んできたのはその直後だった。
後ろから、ビショップ、カストル、そして精霊王の妹であるアンジェが姿を現す。
「お前!!　エレナから離れろ!!」
ルークは精霊王に向かって銀色にきらめく剣を叩きつけようとした。
精霊王は口元に笑みを浮かべながらそれを回避する。
その笑みは、勝利と喜びの笑みだった。

「お姉ちゃん！！　お姉ちゃん！！」
「あんたがエレナなの！？　しっかして！！」
ビショップとカストルが必死にエレナを揺さぶる。
しかし、エレナは、正しくはエレナの体に宿った
カトレイアは、目を見開いたまま動かないばかりだった。
同化したばかりでまだ魂が定着していないのだ。
自体に気付いたのはアンジェだけだった。
「兄さん！！　やっぱりあなたは……！！」
「もう手遅れだ！！　あの娘の体に、あの娘の
魂はすでにない！！　私の愛するカトレイアが、
ようやく蘇ったのだ！！」
「お姉ちゃん、が……？」
精霊王の言葉に、カストルはショックのあまり動けなかった。
生き返る意思などなかった姉を、彼は生き返らせてしまったのだ。
でも、カストルにも彼の気持ちが分かる気がして、
そんな自分を心中で責めた。
「エレナは、エレナはどうなったんだ！！」
「そんな娘は知らぬ。カトレイア、ようやく君にまた会えた！！」
精霊王が彼女に近づく。もはや、ルーク達の姿は彼には
見えていなかった。かつて愛した娘、カトレイア以外は。
「クラウン……」
ようやくカトレイアが顔を上げた。
その顔にはどこか憂いが宿っている。
「カトレイア……！！」
「クラウン……！！」
間に合わなかった、と膝をついたルーク達は、
かつての恋人達が抱き合おうとするのを、
ただ見ているしかできなかった――。

精霊の巫女は城の屋上で（後書き）

ついに精霊王の恐るべき野望が果たされました。
ショックを受けるルーク達、カトレイアは、エレナはどうなってしまうのか！？
　もうすぐ完結ですが、最後まで見てくださるとうれしいです。

元精霊の巫女の旅立ちと精霊の巫女の救出

精霊王と、エレナの体に宿った
カトレイアはしばらく抱き合っていた。
ルークは彼女自身ではないと頭では
分かっていたけれど、ショックのあまり
口もきけない状態だった。
と、いきなり精霊王がふらつきながら
彼女から身を離した。
彼女の手には、血がついたナイフが
いつの間にか握られていたのだ。
カトレイアの目に涙がたまっていた。
「ごめんなさい、こうするしか……
こうするしかなかったの！！」
悲痛な叫びがその場に響き渡る。
ナイフから垂れ落ちた鮮血が、
ぽたりぽたりと雫を作った。
「カトレイア……」
「来ないで！！」
なおも近づこうとする精霊王に、
カトレイアは悲鳴のような声をあげて
ナイフを振りまわした。
精霊王は衝撃を受けたように手を止める。
カトレイアはそんな彼をキッと睨みつけていた。
「裏切るのか、カトレイア……」
「裏切ったのはあなたよ！！　わたしは言ったわ！！
村の人達を殺すのをやめてって！！
それに、私は一度だって生き返りたいなんて言ってない！！
どうして分かってくれないの……！！」

カトレイアは血のついたナイフを放りだすと、
その場に泣き崩れた。精霊王は動けない。
代わりに、アンジェが彼女に近づいていた。
「もういいです。あなたは休んでいてください」
「でも……！！」
「愛した人を殺すのは褒められたことではありませんわ。
ここは私たちが決着をつけます」
カトレイアは最初あらがったが、優しい声でアンジェに
声を掛けられて大人しくなった。
カトレイアは、まだ精霊王を愛している。
村の人間を殺されても、彼女は彼を嫌いきる
ことができなかったのだった。
「アンジェも下がっててよ。ここは俺達がやる」
「いえ、兄を止めなれなかったのは私の責任です」
「僕達が、兄妹が戦うのを見たくないの！！」
「そうよ！！　恋人同士が戦うのも、兄妹同士が
戦うのも褒められたことじゃないわ！！」
アンジェは最初一緒に戦おうと思ったらしいが、
ルーク、ビショップ、カストルに止められて断念した。
ルークは？精霊の剣？をしっかりと精霊王に向けている。
一番先に動いたのはカストルだった。
籠手のついた腕を振りまわし、精霊王に攻撃を見舞う。
しかし、精霊王は余裕の表情でそれをかわした。
悔しげな顔をしながらカストルが後退する。
「次は僕だよ！！　ミストラル（鎌鼬）！！」
ビショップは双子のジェモーの力を借りて魔法を使った。
ジェモー達が心配そうに見守る中、風の刃は精霊王の
マントの端だけを傷つけた。
精霊王は彼らを完全に侮っているのだろう、
自ら攻撃を仕掛けもせずあざ笑っている。

ルークは彼を睨みつけると、いきなり
剣を構えたまま飛びかかった。
「うわあああああああああっ！！」
悲鳴じみた気合の声と共にルークは剣を叩きつける。
それは精霊王に軽く防がれてしまい、突き飛ばされた
ルークはその場をごろごろと転がった。
（強い……！！）
ルークの脳裏にアンジェの言葉が蘇った。
？彼はカトレイアを生き返らせるために
命をかけようとしています？
彼が強いのは、彼女のために命をかけて
頑張っているからだろう。
「だけど、俺だってエレナを想う気持ちは負けない！！
あんな奴に、エレナを好き勝手にされてたまるか！！」
ルークはキッと精霊王を睨みつけた。
精霊王が本気なように、ルークも本気で命を
かけて彼女を取り戻したいと思っていた。
そのためならば、死んでも構わない。
「皆、俺に力を貸してくれ！！」
双子の風の精霊ジェモー、闇の精霊リオン、海の精霊ポワソン、
水の精霊ヴェルソー、炎の精霊スコルピオン、大地の精霊カプリコ
ルヌ、
根源の精霊バランス、月の精霊ヴィエルジュ、大樹の精霊ベリエ、
太陽の精霊サジテール、星の精霊カンセール、守護の精霊トロー。
全ての精霊がルークの？精霊の剣？に力を与え始めた。
精霊王は嘲笑をやめて睨むようにルークを見ている。
「どうか、精霊王をお止めください」
「アンジェ様の泣き顔は見たくないしな！！」
「……仕方ねえな。力貸してやるよ」
「頑張ってくださいねルーク」

「あなたならばできます」
「やっちゃえ～！！」
「お前の気持ち信じたぜ～」
「精霊王は強いぞ。あなどるな？」
「あんたならできると信じたから
力を与えたんだからね！！」
「……ルーク、ならできる……」
「頑張りなさいよルーク！！」
「……力は貸した。後は、
お前の頑張り次第だ」
「しっかりしなさいよね！！」
　精霊たちは応援したり叱咤激励
していたりしていたが、やがて
姿が見えなくなった。
　ルークの剣は全ての精霊の力で
虹のように眩くきらめいている。
　カストルとビショップは、すでに
攻撃しようと精霊王に迫っていた。
　ルークに注目していた彼は、
二人の攻撃をかわすのが遅れる。
「くらいなさい！！」
「僕達だってもう負けない！！」
　カストルの拳が精霊王のわき腹をえぐる。
続いて、ビショップの放った矢が彼の足に
命中して動きを鈍らせた。
「ルーク今！！」
「今だよルーク！！」
「分かった！！」
　ルークは精霊王に向かって剣を構えていた。
精霊王は彼の攻撃をかわしそうとしたらしかったが、

背後からアンジェがはがいじめにした。
「離せアンジェ！！」
「離しません！！　絶対に！！　たとえ、一緒に殺されたって構いません！！」
カトレイアも、体がエレナのものでなければ同じことをしただろうとアンジェは思った。
カトレイアの目は決意を秘めて輝いている。
「闇を祓はらいいし力となれ！！
浄化の光、百花乱舞（フルール・ゼフィール）！！」
剣気が精霊王の背後に駆け抜けた。
彼は悲鳴のような声をあげてうずくまり、アンジェはその場に膝をついた。
「負け……た、のか……」
精霊王の口から血が垂れ落ちていた。
精霊を統べる王でありながら、恋しい人の面影を求めて穢れてしまった彼は、浄化の力を前に敗れたのだった。
「兄さん！！　兄さん！！」
アンジェが涙をこぼして泣きじゃくる。
ルークも、ビショップも、カストルも思わず動きを止めてしまった。
静寂の中、アンジェがただすすり泣く声が響き渡る。と、動いたのはエレナの体にその魂を宿したカトレイアだった。
「お姉ちゃん！！」
「……カストル。二度も、私の死を見させてしまってごめんね。
私は彼と共に行きます」
カストルの声に反応した彼女は、生きていた頃と同じ姉の表情で彼女の髪を撫でた。

カストルが目から涙をこぼし、慌てて
ビショップが彼女を抱き寄せる。
「随分と待たせてしまったわね、クラウン」
クラウン、と昔の名前を呼ばれた精霊王は微かな笑みを浮かべた。
ようやく、と発した声はカトレイア以外には聞こえなかった。
「さあ、行きましょう。今度は、一緒に」
「ああ。ずっと、この時を、待って……いた……」
カトレイアが精霊王の手を取る。
精霊王は心からの笑みを浮かべながらその手を握り返した。
そこで、ルーク達は初めてカトレイア本人の姿を
見ることができた。カトレイアの魂が、精霊王の魂の
手をしっかりと取って天へと登っていく。
魂が抜け出たエレナの体は、がくりと膝を
折ってルークの方に倒れ掛かってきた。
ルークはぎょっとなって体を受け止める。
「……るー……く？」
「エレナ！！」
今度は本当にエレナだった。
カトレイアの魂が消滅したことで、エレナの
魂はまた自身の体へと戻っていたのだ。
「よかった！！　よかったエレナ！！」
「ルーク！！　やっぱり来てくれたのね！！
来てくれると、そう思っていたわ！！」
ルーク達はしばらくそのままで抱き合っていた。
勝てないわね、と言わんばかりの顔でカストルがため息をつき、
ビショップはそんな彼女の体を力を込めて抱きしめていた。
ルークがエレナの宝物、百花白蓮（フルール・ブラン）の髪飾りを
手渡すと、彼女はまるで花がこぼれるような笑顔になった――。

元精霊の巫女の旅立ちと精霊の巫女の救出（後書き）

投稿がまた長く開いてしまって
すみません。今回はルーク達が
精霊王を倒す場面と、カトレイアと
彼がついに天へと昇り幸せに
なる展開を書けました。
今まで見てくださった方、
本当にありがとうございます。
次回のエピローグで
「スピリッツ」もとうとう
終わりになります。
ひょっとしたら、ルークとエレナと
カストルとビショップのその後とか、
新しく精霊王になったアンジェとか、
いろいろ短編か長編を書くかもしれません。
かなり後にはなると思いますが。

エピローグ　～精霊の巫女と精霊の勇者～

ルーク＝ウレイアは、さらわれたエレナ＝ルクウィッドを救出して無事に村に帰宅した。
もちろん、ビショップ＝ルクウイッド、カストルも一緒である。エレナを腕に抱いたルークが村に戻ってきた時、村人たちの歓声が彼を祝福した。
今までルークを馬鹿にしていた者たちも、ルークが彼女を助け出したことでようやく認めたようだ。
ただ一人、エレナの祖父だけは別だが。
「わしはまだウレイアの小僧を認めておらんぞ！！
絶対に認めたりなぞせんからな！！」
だが、エレナの祖父も心の奥では彼を認めていた。
認めたくないのは、ルークが落ちこぼれだった
からではなく、エレナの好きな人だからなのだろう。
ビショップは祖父の真意にそこで初めて気づいたのだった。
今までいじめてきたのも、エレナに進言していたのも、全ては孫娘大事と考えてきたからのようだ。
「おじいちゃん！！　もういい加減にしてよ！！」
しかしエレナはその事実に気づいていなかった。
ぷうっと頬を膨らませつつ祖父に文句を言う。
祖父が「エレナ～」と情けない声を上げたので、
さすがにビショップが彼女の耳に何事か囁いた。
エレナのエメラルドグリーンの目が瞬き、続いて
祖父を温かい目で見つめた。
「ねえおじいちゃん、私ルークが好きなの」
「え、えええエレナ／／／！！」
ストレートな言葉にルークの顔が赤く染まった。
悲しそうに二人を見つめるカストルの方を、なぐさめる

ようにビショップが叩く。カストルは少しホッとしたように笑うと視線をビショップに向けた。
「おじいちゃんが私のことを大切に思うのは分かるわ。だけど、おじいちゃんにもルークを認めてほしいの」
「よろしくお願いします！！」
ルークが頭を下げる。祖父は渋い顔になったが、ためいきをつきながらもルークの手を取った。これが返事の代わりの様だ。
「エレナを頼んだぞ、ウレイアのこぞ……ルーク」
「はい！！　エレナは絶対に幸せにします！！」
祖父は「ウレイアの小僧」と言いかけて慌てて「ルーク」に直した。
エレナの顔が幸せそうに輝く。ビショップもカストルも、祝福するように
手を叩いて二人を見守った。
「さあ儀式のやり直ししようよ！！」
こうして、中断していた精霊祭が再会したのだった――。

最初から儀式はやり直しになった。再び精霊の巫女の衣装をまとったエレナが美しき舞を披露する。ルークは今回は前回のような発言はせず「綺麗だ」と彼女の姿を褒めた。
エレナの舞いは見事で、最初に舞った時よりも数段動きが洗練されているように思えた。
「精霊の巫女は、ルーク＝ウレイアをパートナーに指名します」
ヒュウと口笛を吹く音が響いた。今度は前回のように落胆する男性もいない。祖父も幾分柔らかくなった視線で二人を見ていた。
誰もがルークとエレナを祝福していた。
ルークはエレナがさらわれたことを思い出して一瞬躊躇したが、今度は絶対に離さないとばかりに彼女の手をしっかり握った。
「ルーク、やっとあなたと踊れるのね」
エレナの髪には百花百連（フルール・ブラン）の髪飾りがしっかり飾られていた。

過去を思い出したルークは誇らしい気持ちでそれを見つめる。
「俺もエレナと踊れてうれしいよ」
二人は楽しそうに踊りだした。踊ったことのないルークはあまりうまく
リードができなくて一同の笑いを誘ったが、エレナはそれでも嬉しそうだった。
と、踊りが終わった後に七色の光が壇上にきらめいて二人を包み込んだ。
ルークとエレナ、そしてビショップとカストルが頭上を振り仰ぐと、精霊の女王と
なったアンジェが女神の様な笑みで四人を見守っていた。
さようならとその口が動く。一瞬その目に涙が光ったのが四人には見えた。
精霊の女王となった彼女とは二度と会えないかもしれない。
四人の目にも涙の粒が光ったが、彼女が泣いていないのだからと四人も
涙はこらえて彼女を見つめていた。やがて、彼女の姿がかき消える。
『エレナ！！』
アンジェが消えたすぐ後のことだった。
いつの間にか、以前『精霊王の城』に一緒にいた仲間たちが
そこには立っていたのだ。後日そのことを聞くと、逃げ遅れそうになってアンジェに救われたのだという。
リエンカ、ステラ、ジゼット、ミルカがエレナに抱きついた。
ルークは彼女たちの反応から、エレナが今まで仲良くしていた友人たちだなと思った。
エレナも涙をながしながら四人を順々に抱きしめていた。
こうして、ルーク達の冒険は終わりを迎えたのだった――。

エピローグ　～精霊の巫女と精霊の勇者～（後書き）

『スピリッツ』もようやく終わりを迎えました。
ひょっとしたらまた後日談や続きを書くかもしれませんが、
お話はここで終わりとさせていただきます。
今まで見てくださっていた方、本当に
ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9058l/

スピリッツ！！　～おちこぼれ勇者の大冒険～

2012年1月6日10時46分発行